日本語結果表現に関する予備的考察

宮　腰　幸　一

要旨

本稿は、日本語の「結果表現」の適切な定義・分類と「結果句/結果構文」の意味・機能的特徴づけの二点について考察する。一点目については、まずキーワードの「結果」を二つに分けて定義し、それに基づいて「結果表現」を定義し、さらに「結果表現」をいくつかの素性を使って細かく整理・分類する。それによって、「結果表現」全体における、いわゆる「結果句/結果構文」の位置づけを明確にする。二点目については、「結果句」とは結果相におけるモノのサマ(またはモノのサマのサマ/ホド)と動詞成分の表すコトのサマ/ホドの両方を表す成分であり、文法的位置づけとしては、副詞と述語の両方の機能を果たす「述語的副詞」であると主張する。そして、副詞性と述語性には程度があり、日本語の「結果句」は全般的に副詞性の方が圧倒的に強いタイプであることを実証する。さらに、日本語「結果構文」は、「結果句」の意味役割的指向性という観点から少なくとも五つのタイプに下位分類されることも示す。*

1. はじめに

現代言語学では、「結果/result(ative)」という語を含む用語が数多く使われている。[1] 例えば、文レベルでは「結果構文」・「結果文」・「結果表現」、語句レベルでは「結果句」・「結果(二次)述語」・「結果副詞」・「結果(複合)動詞」、「結果名詞」、「結果目的語」、「結果繋辞」、存在論的/意味範疇レベルでは「結果状態」・「結果様態」・「結果事象」、アスペクト局面/解釈レベルでは「結果相」・「結果残存」・「結果継続/持続」・「結果維持」・「結果所有」など、枚挙にいとまがない。また、これらに「強い/弱い/疑似(見せかけの)」や「本来的/派生的」といった修飾語句をつけた用語を含めれば、その数はさらに増える。それらはそれぞれそれなりの理由で使用されており、そうした用語を用いた記述・分析が様々な言語現象の解明に寄与してきたことに疑いはない。

しかしその一方で、さらなる検討を要する問題が少なくないことにも目を向ける必要がある。まず、そもそも最も核となる概念・用語である「結果」でさえ、ほとんどの先行研究で定義されずに用いられている。同様の事態が上記のレベルの概念・用

語にも見られる。そのため、同じ用語を用いた研究の間にも考察対象のずれが生じているケースが散見される。例えば、(1)の文は(ゲシュタルト性の問題を横に置けば)たいてい異論なく「結果構文」とみなされるが、(2)や(3)はそうではない。

(1) a. 一郎が花瓶を粉々に割った。
　　b. 花瓶が粉々に割れた。
　　c. 花子が髪を黒く染めた。

(2) a. 花瓶が割れた。
　　b. 二郎がドアを押し開けた。
　　c. 良子が部屋をきれいにした。

(3) a. 三郎がパンにバターを厚く塗った。(Washio 1997: 18; 一部改変)
　　b. 春子が器にねぎを平らに並べた。　(影山 1996: 236; 一部改変)
　　c. ライトで水が白く光った。　(矢澤 2007: 87; 一部改変)

(2a/b/c)はたいてい単なる自動詞文/複合動詞文/使役文とみなされるが、明らかにそれらにも<結果性>が見てとれる。実際、(2a)の「割れる」(や対応する英語動詞 break)のような動詞を「動作動詞・様態動詞」との対比で「結果動詞/result verb」と呼ぶ研究(三原 1997; Rappaport Hovav and Levin 1998, 2010)、(2b)タイプの述語を「結果複合動詞」と呼ぶ研究(申・望月 2009)、そして(2c)タイプの文を「結果構文」の一例とみなす研究がある(黒田・李・井佐原 2005)。(3a)はいわゆる「疑似(みせかけの)結果構文」(Washio 1997)、(3b)は「結果様態」を表している文(影山 1996)、(3c)は(結果相とは別のアスペクト局面の)「状況相」を修飾する成分を含む文(矢澤 2007)として「(真の)結果構文」とはみなさない分析もあるが、それら(の一部)を(1)タイプとの違いを認めながら「結果構文」の一種とみなす分析もある(井本 2003, 2006, 2007, 2009, 2012; 岩田 2006, 2009, 2012; Iwata 2006, 2008; 宮腰 2006, 2007a/b/c, 2008, 2009, 2012; Miyakoshi 2010)。

こうした現状に鑑み、本稿は前半(2～4節)でまずキーワードの「結果」を厳密に定義することから議論を始め、それに基づいて「結果表現(文レベルだけでなく語・句・非動詞/非時制節レベルも含む表現)」の外延を明確に規定し、それをいくつかのレベルと素性で整理・分類しながら結果表現の全体像を提示する。後半(5～7節)では、その中の「結果構文」に深く切り込み、その非動詞成分――いわゆる「結果句」――の三つの特性(指向性、副詞性、述語性)に基づいてその内部をさらに細かく下位分類しながら、それらを意味・機能的に特徴づける。最後に8節で、本研究の主な提案をまとめ、今後の課題について簡単にふれる。

2.「結果」の定義

「結果」とは、一見自明のようだが、実はそうでもない。ごく単純な例の(2a)「花瓶が割れた」から議論を始めよう。この文は花瓶が割れていない状態から割れた状態になったコトを表しており、そのコトにおける「結果」は、＜(花瓶が)割れている＞という＜状態＞と言える。[2] それゆえに、多くの先行研究はそれを「結果状態」と呼び、それをさらに詳しく表す成分――例えば(1b)「花瓶が粉々に割れた」の「粉々に」のような成分――を「結果句/結果(二次)述語/結果副詞」と、そのような成分を含む文を「結果構文」と呼んでいる。

では、述語動詞を他動詞に変えるとどうなるであろうか。(1a)「一郎が花瓶を粉々に割った」を例に考えてみよう。この文は一郎がある花瓶に働きかけ、それが原因でその花瓶が粉々になったコトを表しており、そのコトにおける「結果」は、(1b)と同様に＜(花瓶が)粉々に割れている＞という＜状態＞と言えそうである。しかしこの場合は、＜花瓶が粉々になった＞という＜変化＞とも言えそうである。その証拠に、(1a)は「一郎が花瓶を割った結果、花瓶が粉々になった」とパラフレーズできる。つまり、「(1a)がもたらした結果は何か」という問いに対して、「花瓶が粉々であるコト(状態)」とも答えられるが、「花瓶が粉々になったコト(変化)」とも答えられる。

では、言語学的に、そのどちらを「結果」とみなすべきか。あるいはその両方を「結果」として認めるべきか。いずれにしろ、その判断の基準は何か。そして、その根拠は何か。これらの問題は、「結果」という用語が言語学において広く長く使用されてきたにも関わらず、未だに議論されておらず、そもそも問われてもいない。

「結果」の規定の基準としてすぐに思いつく一つの案は、時間的前後関係に基づくものである。コトを時間軸に沿って二つ(以上)の部分に分割し、そのうちの後(または最後)の部分を＜結果＞と規定すると、上述のように(2a)は＜(花瓶が)割れていない状態＞と＜(花瓶が)割れている状態＞に分かれ、そのうちの後者が＜結果＞となる。(1a)は＜一郎が花瓶に働きかける行為＞と＜花瓶が粉々に割れる変化＞とに分ければ＜変化＞が＜結果＞に、(2a)と同じようにそれをさらに二つの状態に分ければ＜(花瓶が)粉々に割れている状態＞が＜結果＞となる。[3]

しかし、この規定は明らかに不十分である。単に時間的に後続しているだけでは＜結果＞とは言えないケースが数多く存在するからである。例えば、夏子が英語を勉強し、その後に数学を勉強しても、(4a)のようには言えないし、四郎が家に一時間いて、その後に五郎がそこに一時間いても、(4b)のようには言えない。

(4)　a. # 夏子が英語を勉強した結果、数学を勉強した。
　　b. # 四郎が家に一時間いた結果、五郎がそこに一時間いた。

この問題は、「結果」の規定の条件として＜因果関係＞を加えればすぐに解決する

ように見える。＜英語を勉強する＞と＜数学を勉強する＞という二つのコトの間にも、＜四郎が家に一時間いる＞と＜五郎がそこに一時間いる＞という二つのコトの間にも因果関係があるとは言えそうもない。周知の通り、因果の規定自体が哲学的・言語学的大問題であるが、ここでは暫定的に、McCawley (1976: 123)の定義(ϕ causes $\psi \equiv$ if not ψ, then not ϕ)を採用しておく。[4] この定義によれば、例えば、「＜英語を勉強するコト＞が＜数学を勉強するコト＞を引き起こした」が成り立つかどうかは、「数学を勉強しなかったら英語を勉強しなかっただろう」と言えるかどうかによって決まるが、通常そう言えないので、それらの間には因果関係はないことになる。したがって、＜結果＞とは＜原因＞に対する概念であると仮定すれば、確かに(4)の問題は解決するように見える。実際、「結果」は辞書でもたいていそのように定義されている。例えば『広辞苑(第六版)』では、「原因によって生み出されたもの。また、ある行為によって生じたもの。その生み出された状態。」と定義されている。

しかし、この定義もまたすぐに別の問題に直面する。まず、この規定では冒頭に挙げた(2a)「花瓶が割れた」のようなごく単純な例が扱えない。この文が表している事象の＜結果＞が＜(花瓶が)割れている＞という＜状態＞であるなら、その＜原因＞は何であろうか。考えられる可能性は四つあるが、そのいずれにも問題がある。まず、＜花瓶が割れる＞という＜変化＞を引き起こす外的な要因(例えば＜人による花瓶への働きかけ行為＞)があればそれを＜原因＞とみなせるが、そのような外的要因は必ずあるわけではない上に、それがある場合でも、(2a)タイプの自動詞文が表している(プロファイルしている)事象にはその部分は含まれていない——含まれていれば「一郎が花瓶を割った」のような他動詞文になる。一方、その変化は内的な要因——花瓶自体の内在的活動——によって引き起こされたという可能性も考えられるが、それが本当に＜原因＞と言えるかは自明ではない。例えば、能格動詞の表す、内的要因によって引き起こされた変化を同定するテストの一つ「Sがしたことは Vだ」を(2a)に適用してもほとんど容認されない——「?/*花瓶がしたことは割れたことだ」。また、＜(花瓶が)割れていない＞という＜状態＞が＜原因＞であるとは、論理的に言えない——上で挙げた定義を適用すれば、(「花瓶が割れていなかったら、花瓶が割れていただろう」という)自己矛盾に陥る。さらに、＜花瓶が割れる＞という＜変化＞が＜原因＞であるとみなせば、＜原因＞の内部に＜結果＞が完全に含まれることになるため、この可能性も論理的にあり得ない。[5] このように、もし＜結果＞を＜原因＞に対する概念として規定したら、＜花瓶が割れた＞には＜原因＞がないので＜結果＞もないことになってしまう。

さらにその帰結として、(1b)「花瓶が粉々に割れた」のような文を「結果構文」とみなす先行研究の分析も成り立たなくなってしまう。なぜなら、従来の分析では、(1b)

の「粉々に」のような語句は動詞(とその項)が表す事象の結果状態をさらに詳しく描写する成分とみなされ、そのような「結果句/結果(二次)述語/結果副詞」を含んでいることが「結果構文」の必須条件と考えられているが、「花瓶が割れた」が表す事象に＜結果＞がないならその条件は満たされないことになってしまうからである。

このような事態を回避するには、＜結果＞の規定の方を変えるしかない。つまりここでの観察は、因果関係を＜結果＞の規定の必要条件とみなすべきではないということを示唆している。

ただし、その一方で、「ϕの結果、ψ」という形式の文(4)「#夏子が英語を勉強した結果、数学を勉強した/#四郎が家に一時間いた結果、五郎がそこに一時間いた」の逸脱性を説明するには、因果関係に言及する必要があることに変わりはない。このジレンマはどのように解消できるだろうか。

次の例は、＜因果関係＞が＜結果＞の規定にとって十分条件でもないことを示しており、上記のジレンマをさらに深刻化させる。

(5) a.　本棚が倒れた結果、花瓶が粉々に割れた。
　　b.　*本棚が花瓶を粉々に倒れた。

地震か何かによって本棚が倒れ、それが原因で花瓶が粉々に割れることは現実世界で十分起こり得る事態であり、それを(5a)のような複文で描写することはできるが、(5b)タイプの単文ではできない。その非文法性は、非対格性に関する研究成果の一つとしてよく知られているように、この特定の文やその成分の問題としてではなく、単一の文や動詞が(語彙的に)表すことができる意味の範囲――より限定的には、事象のタイプ――の限界に関わる文法論的問題としてとらえられるべきである。そこに因果関係は関与しているが、それは文の単複とは直交関係にあるため、それだけでは問題の解決にならない――例えば(5a)と(5b)の間に線を引けない。[6] 必要なのは、外界における物事の因果関係だけに基づく規定ではなく、もう一歩進んだ、文法論的に意義のある「結果」の規定である。「文法論的に意義のある規定」とは、それによって当該言語の(あるいはヒトの言語一般の)文法について何らかの実質的言明ができること―― 例えば、ある種の表現の容認度・統語形式・意味解釈等について何らかの説明・予測ができること――を意味する。(5a)と(5b)の間や(1a)と(5b)の間に＜文法性＞という線を引けるかどうかはその経験的テストの一例である。

このような理由から、本稿は「結果」を次の二つに分けて定義する(日本語では適切な用語で呼び分けられないが、英語ではresult/resultativeで差異化できる)。

(6) a.「結果(result)」とは、原因によって引き起こされたコトである。
　　b.「結果(resultative)」とは、単一事象の完結点以降のアスペクト局面である。

(6a)は、因果関係によって結ばれた二つのコトを表す文法的な複文(例えば(5a)「本

棚が倒れた結果、花瓶が粉々に割れた」)とその関係がないために容認されない複文(例えば(4a)「#夏子が英語を勉強した結果、数学を勉強した」)の間の線引きをするのには必要である。しかし、上述のように、(1b)/(2a)「花瓶が(粉々に)割れた」のようなごくありふれた単文の記述・説明には役に立たない。その種の文法的文と(5b)「*本棚が花瓶を粉々に倒れた」のような完全な非文との間に線を引くこともできない。そのためには、「結果」を(6b)のように定義し、それに基づいて「結果表現(resultative expression)」を規定する必要がある。

(6b)は、因果関係には直接的に依拠せずに、事象のアスペクト局面の観点から「結果(resultative)」を定義している。そのキーワードは、「単一事象」と「完結点」の二つである。「単一事象」とは、語彙的に単一の動詞によって(スキーマ的に)コード化し得るタイプの事象のことである。詳細に関してはまだまだ未知の点が多々あるが、少なくとも、語彙的に単一の動詞で表すことができる事象のタイプはかなり限られており、外界で起こり得るすべての事態が自由に切り取られるわけではないという点は、過去数十年の語彙意味論研究でかなり明らかになってきている(Pinker 1989; Jackendoff 1990; 影山 1996; Rappaport Hovav and Levin 1998, 2010等を参照)。具体的には、<行為>・<変化>・<状態>のような単純な事象タイプ("event templates/schemata")を表す動詞(例えば「叫ぶ」・「割れる」・「ある」等)に加えて、<行為・変化(行為が変化を引き起こす事象)>や<行為・状態(行為が状態を維持する事象)>のような複合的事象タイプを表す動詞(例えば「割る」・「保つ」等)も数多く観察されているが、<変化・変化(ある変化が原因となって別の変化を引き起こす事象)>のようなタイプを表す動詞は観察されていない。[7] これは単なる偶然ではなく、二つの下位事象が力動的にどのような関係にあるか——プロトタイプ的には、行為主による変化主への直接的働きかけがあるかどうか——に依拠している。したがって、例えば(5)が表している(あるいは意図している)事態は、本棚が自らのエネルギーを行使することによって花瓶に働きかけ<行為>をし、それが原因となって花瓶が粉々に割れるという<変化>を引き起こしたと概念化できないために、<単一事象>とはならない。より厳密に言えば、その事態を下位事象に分割せず、全体を一まとめにして概念化し、「あるコトが起こった」のように記号化することは可能だが、それを二つの下位事象(<本棚が倒れたコト>と<花瓶が粉々に割れたコト>)から成る単一事象として概念化・記号化することはできない。

「完結点」とは、変化事象の「成立点」であり、事象の「成立点」とは、そこでその事象が成立したと言える時点のことである。例えば、<叫ぶ>という事象は、何かを一言でも大声で発したら成立したと言えるので、その時点(叫んだ瞬間)が成立点となる。また、<熟す>という事象は、果物などが慣習的に了解された、ある色・甘さになった時に成立したと言えるので、その時点が成立点となる。それら二つの事象は、

どちらにも成立点があるという点では同じだが、完結点があるかどうかでは異なる。<叫ぶ>は<行為>であって<変化>ではないので、その成立点は完結点とはならないが、<熟す>は<変化>なので、その成立点は同時に完結点でもある――すぐ上で提示した完結点の定義に「変化事象の」という指定があることに注意されたい。ある動詞が(行為に加えて)完結点を含む(状態)変化を表しているかどうかは、完結点以降のアスペクト局面における参与者Xの状態を「XがVした(された)状態だ」と言えるかどうかでテストできる。[8] 上記の例では、「花子が叫んだ」後に「?? 花子が叫んだ状態だ」とは通常言えないが、「苺が熟した」後に「苺が熟した状態だ」とは言えるので、(基本的には)<変化>事象は後者のみである。[9] そして、まさにその<Vした(された)状態>の局面が、(6b)の定義により、<結果>となる。以下、その局面性を際立たせて表す際は、それを「結果相(resultative phase)」と呼ぶ。

3.「結果表現」の定義

前節で提示した「結果(相)」の定義(6b)に基づいて、本稿は「結果表現」を次のように定義し、その条件(「結果相における状態を表す」)を満たすかどうかで当該表現の<結果性[±resultative]>を決定する。

(7)「結果表現(resultative expression)」とは、結果相における状態を表す表現である。

まず、キーワードの一つである「状態」の意味を明確にしよう。この用語は、二つの意味で用いられる。一つは、例えば<粉々>や<黒い>のようなモノの非恒常的サマ――項に対する述語の部分――を指す用法であり、もう一つは、<花瓶が粉々だ>や<髪が黒い>のような(静的な)コト――命題全体――を指す用法である。[10]「状態」という用語は結果表現に関する先行研究において必ずと言ってよいほど頻繁に使用されているが、この二つの意味は明確に区別されていない。例えば、「位置変化」と対比して「状態変化」と言う場合の「状態」は前者の意味であり、「位置変化の結果状態(例えば「花子がコップを机の上に置いた」結果生じる「コップが机の上にある」という状態)」と言う場合の「状態」は後者の意味である(<机の上>は存在論的カテゴリーとしてはサマではなくトコロである点に注意)。本稿では、この二つの意味の「状態」を区別する必要がある場合は、前者を「狭い意味の状態」、後者(を含めた両者)を「広い意味の状態」と限定して呼び分ける。

「表現」とは、文字通り、意味を持つ言語要素であり、語・句・(非動詞/非時制)節・文のすべてを含む。[11] ただし、前節で見たように、「結果(相)」の定義に「単一事象」という指定があるため、「結果表現」は実質的に単文(単一の語彙的動詞/時制節から成る文)かその成分となる。

この定義の下では、(1)〜(3)のようなタイプの文、その主要部の動詞、形容詞・(形容)名詞の連用形成分、それらを含む動詞句は、いずれも「結果相における状態」を表しているので、すべて「結果表現」となる。例えば、(1a)であれば、文全体「一郎が花瓶を粉々に割った」だけでなく、動詞「割った」、状態名詞句「粉々に」、それらを含む動詞句「花瓶を粉々に割った」はすべて結果表現となる。また、(2b)の「押し開ける」のような複合動詞、(2c)の「する」と「きれいに」のような使役動詞とその述語的補語(predicative complement)、そしてそれらを含む動詞句や文全体「(二郎が)ドアを押し開けた」・「(良子が)部屋をきれいにした」も結果表現となる。(7)の定義の「状態」を広い意味に取れば、すぐ上で見た位置変化文「花子がコップを机の上に置いた」やその成分の動詞「置く」なども結果表現となるが、本稿は狭い意味の状態(モノのサマ)を表す結果表現に議論を限定する。ただし、5節で見るように、「花子がコップを机の上に置いた」に「逆さまに」のような成分が加わると、それは「結果相における狭い意味の状態」を表すことになるので、もはや純粋な位置変化文ではなくなり、本稿の考察対象になる。

一方、(5a)「本棚が倒れた結果、花瓶が粉々に割れた」のような複文は、(7)の定義では「結果表現」とはならない。この種の文が表している事態は、2節で指摘したように、<原因>とそれによって引き起こされたコト((6b)ではなく(6a)の意味の<結果>)であるが、<(本棚が)倒れる>は自らのエネルギー行使による<行為>ではないため、全体として単一事象とはみなされないからである。この点を明確にするために、以下、(5a)のような「ϕの結果、ψ」という形式の文は「因果表現」と呼び、「結果表現」とは区別する。そして、(5a)タイプの文をそのように特徴づけることによって、その形式でありながら因果関係を表していない(4)「#夏子が英語を勉強した結果、数学を勉強した/#四郎が家に一時間いた結果、五郎がそこに一時間いた」のような文の逸脱性もとらえられることになる。さらに、(5b)「*本棚が花瓶を粉々に倒れた」のような文は、上記の理由で単一事象とはみなすことができない事態を単文で記号化しているため、原理的に非文として排除できる。[12]

このように、「結果」を(6a/b)の二つに分けて定義し、それに基づいて結果表現と因果表現を区別することによって、2節で指摘したジレンマが解消される。具体的には、(1b)/(2a)「花瓶が(粉々に)割れた」のような文を結果表現としながら、(4)/(5b)の逸脱性の説明やそれらと(5a)の間の線引きも矛盾なくできることになる。

次節以降では、このうち結果表現に焦点を当て、それを二段階で細かく整理・分類していくが、その前に結果表現と因果表現の関係について注意すべき点を指摘しておく。まず、因果表現「ϕの結果、ψ」で表されるϕとψは完全に独立の事象を表していなければならないわけではなく、一つの事象と概念化し得るコトを二つに分割し、それらをそれぞれ原因と結果として表すこともできる。その帰結として、結果表

現で表し得るコトと因果表現で表し得るコトには大きな積集合があることになる。これはつまり、結果表現と因果表現は互いにパラフレーズ可能であることが多いということを意味する。そして実際、同じコトをどちらの表現でも表し得るケースが数多く見られる。例えば、結果表現の(1a)「一郎が花瓶を粉々に割った」が表しているコトは、因果表現「一郎が花瓶を割った結果、花瓶が粉々になった」によっても表せる。自動詞ベースの結果表現(1b)「花瓶が粉々に割れた」でさえ、対応する因果表現「花瓶が割れた結果、花瓶が粉々になった」でパラフレーズできる。[13] このような言い換えを「結果構文」のテストとして採用している先行研究があるのはまさにこのためであろう(例えば仁田(2002: 51)を参照)。しかし厳密には、それら二つの表現が表している「結果」の意味は同じではなく、ゆえに、因果表現にパラフレーズできない文法的結果表現の(2a)「花瓶が割れた」や、逆に、対応する因果表現は適格な非文法的結果表現の(5b)「*本棚が花瓶を粉々に倒れた」によって示されているように、両者の言い換えが常にできるわけではないという点をここで銘記されたい。

4. 結果表現の分類

前節で明確に規定した「結果表現([+resultative]の表現)」の外延をふまえて、本節ではその内部をいくつかのレベルと素性で整理・分類する。まず、語彙と文/成分の二つのレベルに分けて話を進めよう。

語彙レベルで結果表現となり得る言語要素は、動詞のみである。それ以外の文法範疇に属する語は、内在的にアスペクトを持っていないので、原理的に語彙レベルでは結果表現となり得ない。[14] 動詞は＜結果性＞をどの程度内在的に持っているかに応じて少なくとも四つのタイプに分類できる。一つ目は、完全に＜結果性＞の要件(「結果相における状態を表す」)を満たしているタイプであり、(1)の「割る/割れる」や「染める」等はその例となる。また、(2b)の「押し開ける」のような語彙的複合動詞や(2c)の使役動詞「する」、そして(広い意味の)連結動詞「なる」もこのタイプである。ただし、(使役動詞としての)「する」と「なる」は結果相における状態をスキーマ的にしか表していないので、その情報を実質的に表しているタイプ——具体的には、語彙概念構造(LCS)において変化事象の結果相におけるモノのサマの枠にあらかじめその動詞固有の意味情報が指定してあるタイプ(例えば、その枠にBROKENという定項指定がしてある「割る/割れる」のような動詞)——とは区別される必要がある。この点はすぐ後で再びふれる。

二つ目は、「結果相における状態」を含意(imply)はしているが、完全に内含(entail)はしていないタイプである。例えば、「拭く」や「磨く」はこの範疇に属する。

それらは、被行為主（行為の対象）が初期相（行為/変化の前の局面）よりきれいになることを含意はしているが、必ずそうなるわけではない――その証拠に、「テーブルを拭いたが、きれいにならなかった」と矛盾なく言える（それに対して、「花瓶を割ったが、割れなかった」とは言えない）――ので、結果相における状態まで完全に内含しているとは言えない。[15]

三つ目は、基本的に「結果相における状態」を内含/含意していないが、文脈によっては、それを含意し得るタイプである。例えば、動詞「走る」は基本的に＜行為＞を内含し、＜変化＞を含意するが（走ればたいてい行為主は位置変化するが、ルームランナー上での運動のように、必ず空間移動があるわけではない点に注意）、「結果相における状態」までは内含/含意していない。その証拠に、２節で挙げたテストにはたいてい通らない――例えば「?? 一郎が走った状態だ」は「苺が熟した状態だ」より明らかに容認度が落ちる。しかし、それが表す＜行為＞の量がある程度あれば、ある領域（例えば心拍数や疲労度）の＜変化＞が含意されることもある。その際は、例えば、「一郎が、10分間走った状態で、脈をチェックした」のように言える。つまり、この種の動詞は、本来的には結果表現ではないが、文脈等の条件が満たされれば結果表現の一成分となり得る潜在的意味は持っているタイプと位置づけられる。[16]

四つ目は、「ある」や「いる」のような存在動詞である。このタイプは内在的に変化のない（広い意味の）＜状態＞を表しているので、＜変化＞を前提とする＜結果＞は原理的に表せない。したがって、どれほど文脈を整えても結果表現とはなり得ない。

これら四つのタイプは、＜結果性＞を表す素性[resultative]の値に括弧をつけることによって次のように表示し分けることができ、本稿ではそれらをそれぞれ(a)「結果動詞」、(b)「結果含意動詞」、(c)「潜在的結果動詞」、(d)「非結果動詞」と呼ぶ。

（８）＜結果性＞による動詞分類

a.　結果動詞：[+resultative]　(e.g. 割る/割れる、染める)
b.　結果含意動詞：[(+)resultative]　(e.g. 拭く、磨く)
c　潜在的結果動詞：[(−)resultative]　(e.g. 走る、叫ぶ)
d.　非結果動詞：[−resultative]　(e.g. ある、いる)

多くの先行研究によって指摘されているように、日本語では、いわゆる「結果句」と共に（完全に文法的な）結果表現となり得るのは、このうち結果動詞と結果含意動詞のみである。

（９）a.　一郎が花瓶を粉々に割った。　(＝(1a))
b.　花子がテーブルをきれいに拭いた。
c.　??/* 二郎がクタクタに走った。
d.　*花瓶が粉々にある。[17]

厳密には、(9d)は一律に容認されないが、(9c)は話者によって容認度が異なる。それ

は上で述べた動詞の＜結果性＞の違いの反映としてとらえられるが、以下の議論ではこの点にはふれない。

では次に、文/成分レベルで結果表現を分類しよう。上述のように、語彙的には結果表現となり得ない形容詞や（形容）名詞なども、結果（含意）動詞と共起することによって文成分としては結果表現となり得る。したがって、成分レベルでは、結果表現を＜動詞性[±verbal]＞（「それが動詞成分か否か」）によって大きく二つのタイプに分類できる。

[+verbal]の結果成分は、いくつかの観点からさらに下位分類できる。例えば、すぐ上で指摘した「結果相における状態を内含しているか」という基準では「結果動詞」と「結果含意動詞」に分けられるし、「動詞が（時制接辞を除いて）単一の形態素から成っているか」という基準では（1）の「割る/割れる/染める」のような「結果動詞」と（2b）の「押し開ける」のような「結果複合動詞」（または「割れている」や「染めてある」のような補助動詞を含む「結果複雑動詞」）との線引きができる。さらに、句構造の観点からは、「結果（含意/複合/複雑）動詞」とそれを主要部とする動詞句/節/文が区別できる。こうしたいくつもの「切り口」の中で、本稿は上でふれた特性（「動詞が結果相におけるモノのサマに関する情報を実質的に指定しているか」）を表す素性として＜（結果状態指定の）実質性[±substantive]＞を仮定し、それによって様々な結果動詞を（i）「割る/割れる」のような＜実質的結果動詞＞と（ii）（使役動詞としての）「する」や連結動詞「なる」のような＜結果枠組み動詞＞――結果相を含む（行為・）変化事象の枠組みだけをスキーマ的に表す動詞――とに下位分類する。これ以降、「結果動詞」という語は今述べた意味での＜実質的結果動詞＞を指す用語として使用する。また、結果動詞と結果（含意/複合/複雑）動詞との違いは、以下の議論の論点――[－verbal]の結果成分（を含む文）の分類――には重要な関わりがないので、その区別も（一部を除いて）しない。

では[－verbal]の結果成分の分類に移ろう。[－verbal]の結果成分は、＜（その成分の）義務性[±obligatory]＞（「その非動詞成分が動詞によって義務的に要求されているかどうか」）によって二つのタイプに分類できる。一つは（2c）「良子が部屋をきれいにした」の「きれいに」のような述語的補語成分であり、それを「結果補語」と呼ぶ。もう一つは（1a/b/c）「一郎が花瓶を粉々に割った/花瓶が粉々に割れた/花子が髪を黒く染めた」の「粉々に/黒く」のような成分である。それはいわゆる「結果句」であるが、その名称は二つの理由で不正確であるため採用できない。まず、「結果表現」を上記のように定義した以上、「粉々に」や「黒く」のような非動詞成分だけでなく、「花瓶を（粉々に）割った」や「髪を（黒く）染めた」のような動詞成分も「結果表現」となり、かつ、それらはいずれも「句」であるので、そのうち前者のみを「結果句」と呼ぶのは適当ではないことになる。その上、非動詞結果成分には、（10）の「見た目をき

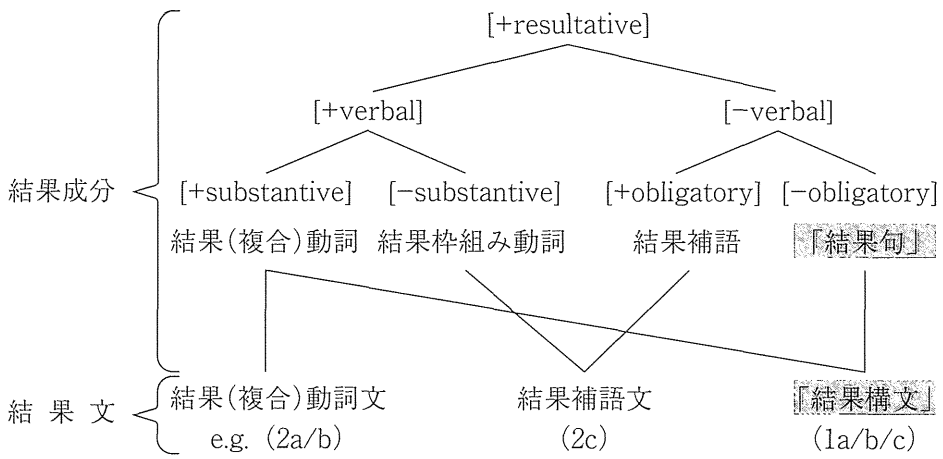
れいに/甘さを控えめに/厚さを３ミリに」のような「(非動詞・非時制)節」とみなされる成分もあるので、句構造レベルの点でも「結果句」という名称は望ましくない。

(10)　a.　三郎が[見た目をきれいに]壁を塗った。
　　b.　四郎が[甘さを控えめに]ケーキを作った。
　　c.　五郎が[厚さを３ミリに]肉を切った。

しかし、適当な名称を選定するには、問題の成分の特性を明らにすることが前提として必要なので、当面は暫定的用語として「結果句」を括弧つきで使用しながら議論を進め、その特性が明らかになった段階で別の用語で置き換えることにする。

ここまで、結果表現を成分レベルで四つのタイプ((i)結果(複合)動詞、(ii)結果枠組み動詞、(iii)結果補語、(iv)「結果句」)に分類してきたが、それらに項名詞句を加えてできる文レベルの結果表現を大きく分けると、(I)結果(複合)動詞とその項から成る(2a/b)タイプの文、(II)結果枠組み動詞・結果補語とその項から成る(2c)タイプの文、(III)結果動詞・「結果句」とその項から成る(１)タイプの文の三種類に分類できる。これ以降、(I)を「結果(複合)動詞文」、(II)を「結果補語文」、そして(III)を暫定的に「結果構文」と(括弧つきで)呼びながら議論を進め、「結果構文」は後ほど「結果句」の特性を反映した名称に置き換える。また、それら三種類の結果表現の総称として「結果文」という用語を使用する。これらをまとめて図示すると、次のようになる。[18]

(11)　日本語結果表現の文/成分レベルの分類(暫定版)



(１)　a.　一郎が花瓶を粉々に割った。
　　b.　花瓶が粉々に割れた。
　　c.　花子が髪を黒く染めた。

(２)　a.　花瓶が割れた。
　　b.　二郎がドアを押し開けた。
　　c.　良子が部屋をきれいにした。

ここで注意すべき点が四つある。まず、上述のように、内在的にアスペクト情報を持っていない[－verbal]の結果成分(結果補語と「結果句」)は、それ自身では結果表

現となり得ないため、必ずそれを可能にしている他の成分がある。結果補語の場合は、必然的に結果枠組み動詞がその成分となる。結果補語文はそれら二つの結果成分を基に形成されていることが、(11)の図ではそれらを結ぶ二本の線の収束によって示されている。同様に、「結果構文」は結果動詞と「結果句」を基にできているので、やはり二つの結果成分からの線が収束している。[19] したがって、厳密には(2c)タイプは「結果枠組み動詞・結果補語文」と、(1)タイプは「結果動詞・結果構文」と呼ぶべきかもしれないが、上で見たように日本語の結果表現は基本的にすべて結果性がプラスの動詞を含むので、弁別性と経済性の観点――必要な弁別性が確保されている限り、用語は短い方が望ましいという方針――から、本稿は「結果枠組み動詞/結果動詞」の部分を除いた名称「結果補語文/結果構文」を(暫定的に)使用する。この点は、日本語だけを見ていれば改めて言及するに値しない問題と思われるかもしれないが、注16でふれたように、[(−)resultative]の動詞が[+resultative]の非動詞成分などと結合して結果文となることを許す言語もあるので、実は取るに足らない問題ではない。この問題は8節で再びふれる。

また、[−verbal]の結果成分を[+obligatory]と[−obligatory]に分けることも、その名称が何であれ、結果表現の適切な記述にとって必要不可欠であるという点にも注意されたい。多くの先行研究ではこの区別が明確になされていないため、1節で指摘したように、同じ用語を用いた研究の間に考察対象のずれが生じる状況が生まれている。例えば、(2c)タイプの文「良子が部屋をきれいにした」(やMary made the room cleanのような他言語の使役文)は、結果構文に関するほとんどの先行研究では(たいてい暗黙のうちに)考察対象から除外されているが、それを結果構文の一種とみなす先行研究もある(黒田・李・伊佐原 2005; Goldberg 1995)。おそらく、そうみなすのはこのタイプの文に[+resultative] [−verbal]の成分――上の例では「きれいに(clean)」――が含まれているからであり、そうみなさないのはその成分が[+obligatory]であるからだと思われるが、いずれにしろ、その線引きの基準は明示される必要があり、それをするには上で定義した意味での<(非動詞成分の)義務性[±obligatory]>という素性が不可欠となる。

ここで、その線引きは先行研究で指摘されてきた<非動詞結果成分の省略(不)可能性(または述語の一次性/二次性)>という基準でできると主張する者がいるかもしれないが、「非動詞結果成分が[+/−obligatory]であるかどうか」と「その成分が省略(不)可能であるかどうか」は、全く同義ではない。ある成分が[+obligatory]であれば、定義上、その成分は省略できないが、ある成分が省略できないからと言って、それが必ず[+obligatory]であるわけではない。例えば、(12a)の文の「たわわに」は、<柿が実る>という変化事象の結果相におけるモノ<枝>の状態を表しているので、(7)の定義では結果成分となるが、(12b)に示されているように、省略するこ

とはできない。

(12) a.　枝もたわわに柿が実った。　(川端 1983: 8)

b. *枝も柿が実った。　cf. *良子が部屋をした。

c.　柿が実った。　cf. *良子がした。[先行文脈なしの読みで]

この点では(2c)「良子が部屋をきれいにした」の「きれいに」に似ているが、明らかに、(12a)は(2c)タイプの使役文ではない——「実る」は使役動詞ではなく、「たわわに」は述語的補語ではない。その証拠に、(2c)とは異なり、(12a)は(12c)のように主語のみを項として取った文にしても完全に文法的である。つまり、(12a)の「たわわに」は、(2c)の「きれいに」と同じように省略はできないが、[+obligatory]の「きれいに」とは違って動詞によって義務的に要求された成分ではないので、タイプ的には[+resultative][−verbal][−obligatory]、つまり「結果句」となる。(ほぼ)同様の現象は、周知のように、英語にも見られる。上で挙げた文(John shouted himself hoarse)の非動詞結果成分 hoarseも省略できないが(*John shouted himself)、それは動詞shoutによって要求された成分ではない上に、shoutは使役動詞ではないので、タイプ的には「たわわに」と同じである。[20] このように、先行研究で指摘されてきた<非動詞結果成分の省略(不)可能性(または述語の一次性/二次性)>という特性は、その種の結果成分やそれを含む結果文の整理・分類をする上でのパラメータとして十分ではない。[21]

さらにこの観察は、その種の非動詞結果成分を、動詞によって要求されていないという理由で、単純に「副詞」とみなすだけは不十分であることも同時に示唆している。というのは、(12a)の「たわわに」は「(柿が)実る」という動詞(節)を直接修飾しているわけではないからである——「枝も」がない文「たわわに柿が実った」であれば直接修飾していると言えるが、(12a)では「たわわに」が「枝も」と結合しない限り文全体が単一化(unify)されない。この観察は、「結果句」の文法的位置づけ、特にその<副詞性>と<述語性>に関して重要な問題を提起することになる。この点は6・7節で詳しく論じる。

本節では、結果表現の全体像(図(11))を提示し、その中においていわゆる「結果句」は[+resultative][−verbal][−obligatory]の成分と、「結果構文」はその成分を含む結果文と位置づけられることを示したが、続く三つの節(5〜7節)では、その内部——(11)で網掛けにしてある部分——にズームインし、「結果構文」を「結果句」の三つの特性(指向性、副詞性、述語性)から下位分類しながら、それらを意味・機能的に特徴づける。

5.「結果句」の意味役割的指向性

「結果構文」の「結果句」は、定義上、結果相における状態――狭い意味では、モノのサマ――を表しているが、そのモノとは動詞が表す事象(コト)の中の参与者であるため、必ずある意味役割を持っている。そして、そのモノが果たしている意味役割を子細に観察・検討してみると、いくつかの限られたタイプしか許されないことが判明する。したがって、「結果句」の意味役割的指向性という観点から、「結果構文」を下位分類することができる。本稿は、それを大きく五つのタイプ――(i)(被行為・)状態変化主指向、(ii)産物指向、(iii)副産物指向、(iv)(被行為・)位置変化主指向、(v)行為・状態/位置変化主指向――に分類する。

5.1 (被行為・)状態変化主指向

最もわかりやすいプロトタイプの一つは、動詞が狭い意味での<状態変化(あるモノがあるサマから別のサマへ移行する事象)>のみを表し、「結果句」がその主体<状態変化主>の結果相におけるサマを動詞の語彙的指定に加えてさらに詳しく描写しているタイプである。例えば、上で指摘したように、動詞「割れる」のLCSにはその結果相におけるモノのサマの枠にあらかじめBROKENという指定があるが、それに「粉々に」が付くと、それはその動詞固有の意味情報を担っている部分(constant/root; cf. Rappaport Hovav and Levin 1998, 2010)をさらにIN SMALL PIECESと限定することになるため、(1b)「花瓶が粉々に割れた」は典型的「結果構文」の一例と言える。これは、6節で詳しく議論するが、副詞による動詞修飾の典型的パターンの一例でもある。そして、その「結果句」が表しているのは状態変化するモノのサマなので、この種の「結果句」とそれを含む文はそれぞれ、「<状態変化主指向>の結果句/結果構文」と分類できる。次の文も、「苺/水」は動詞「熟す/濁る」の表す事象の<状態変化主>であり、「甘く/白く」はその結果相におけるサマを動詞の語彙的指定に加えてさらに詳しく描写しているので、「結果句」の指向性という点では同種の例と言える。

(13) a. 苺が甘く熟した。
　　 b. 水が白く濁った。

ここで、次の三点に注意されたい。まず、これは「結果句/結果構文」のタイプの分類であって、「結果句」として生起する個々の語の分類ではない。例えば「粉々に/甘く/白く」などは上記の文において状態変化主指向の「結果句」としての役割を果たしているが、井本(2012)が詳しく論じているように、そこまで特定の指向性があらかじめそれぞれの語彙項目で指定されているわけではない。[22, 23]

また、上記の三例(1b)/(13a)/(13b)は――さらに言えば、1節で挙げた(3c)「ライ

トで水が白く光った」も――意味役割的指向性という点では同類だが、「結果句」による修飾限定の仕方という点では微妙に異なる。(1b)の「粉々に」は、BROKENに内在するスケール＜破片の細かさ＞の値が最大であるサマ――つまり、内在的ホド情報を含むサマ――を表すことによって動詞の意味を限定しているが、(13a)の「甘く」が表しているのは「熟す」に内在するスケールの一つ＜甘さ＞の標準値であって最大値ではない。その証拠に、(13a)の後に「しかし、あと２～３日すればさらに熟してもっと甘くなる」のような文を矛盾なく続けることができる。[24] (13b)の「白く」には至っては、スケールの値ではなく＜色＞という概念範疇の一成員しか表していない。[25] このようなスケールと修飾限定に関する問題は5.3節で再び取り上げる。

さらに、本節(5.1～5.6節)では「結果句」のモノ指向性に焦点を当てるが、「結果句」が表しているのは結果相における＜モノのサマ＞だけというわけではない。この点は６・７節で詳しく論じる。

典型的「結果構文」のもう一つのタイプは、＜状態変化＞に加えて、それを引き起こす＜行為＞まで含めて概念化された事象を表す他動詞を主要部とした、(1a/c)「一郎が花瓶を粉々に割った/花子が髪を黒く染めた」のような結果文である。この種の文の「結果句」も、(1b)/(13)のそれと同様に、動詞の意味を修飾限定しているが、その指向先のモノ((1a/c)では＜花瓶/髪＞)は＜状態変化主＞だけでなく＜被行為主(行為の対象)＞の役割も果たしているので、＜被行為・状態変化主指向＞の「結果句」と呼び分ける。そして、それと上記の＜状態変化主指向＞を合わせて一つのタイプとみなす際は、「被行為・」の部分を丸括弧に入れて、＜(被行為・)状態変化主指向＞と表示する。

5.2　産物指向

次の例も他動詞ベースの「結果構文」だが、「結果句」の指向性という点では上記のタイプと異なる。

(14)　a.　花子がケーキを美味しく作った。

　　b.　一郎が庭に穴を深く掘った。　　(奥津 1983: 325-27; 一部改変)

これらの文において「結果句」の指向先となっているモノ(＜ケーキ/穴＞)は、他動詞の直接目的語として実現する内項の指示対象であるという点では(1a/c)の＜花瓶/髪＞と同じだが、それらと異なり行為の前の局面(初期相)では存在していないので＜被行為主＞とは言えず、しかも上記の(狭い)意味での状態変化をしているわけでもないので＜状態変化主＞とも言い難い。このような、動詞が表す行為によって生み出されるモノは＜産物＞と呼んで＜(被行為・)状態変化主＞と区別し、そのサマを表す「美味しく/深く」のような成分は＜産物指向＞の「結果句」と呼ぶことにする。

ただし、日本語「結果構文」においては、＜(被行為・)状態変化主＞と＜産物＞という概念的区別が常に文法的に反映されるわけではないことには注意が必要である。[26] 例えば、次の例の「炊く」や「折る」のように、どちらの種類のモノを指す名詞句も内項として取ることができる動詞もある。

(15) a. 二郎がお米を美味しく炊いた。
　　 b. 二郎がごはんを美味しく炊いた。　(宮腰 2007c: 111)

(16) a. 三郎が折り紙をきれいに折った。
　　 b 三郎が鶴をきれいに折った。

特に(15)の場合は、「お米」と「ごはん」はそれぞれ(狭い意味では)調理前と後の穀物を指すので＜被行為・状態変化主＞と＜産物＞だが、どちらもほぼ同じ意味に解釈され、両者の違いがこの形式では文法的に表れない。[27] しかし、多くの動詞ではその違いが明白に出るので、その区別が不必要なわけではない。例えば、(17)に示されているように、「割る」は内項として＜被行為・状態変化主＞は取れるが＜産物＞は取れず、「作る」はその逆のパターンを示す。

(17) a. 一郎が {花瓶/??破片} を粉々に割った。
　　 b. 花子が {??生地/ケーキ} を美味しく作った。

これは各動詞がLCSのレベルで＜(被行為・)状態変化主＞と＜産物＞の区別をしていることを示しており、それはさらに、＜(被行為・)状態変化主＞と＜産物＞はそれぞれ変化事象の＜初期相＞と＜結果相＞のモノ主体であるので、統語的に実現される項に関する語彙的指定はアスペクト局面に基づいてなされていることを示している。

5.3　副産物指向：いわゆる「疑似結果構文」再考

では、いわゆる「疑似結果構文」の「結果句」はどうだろうか。例えば、1節で挙げた(3a)「三郎がパンにバターを厚く塗った」の「厚く」は何のサマを表しているのだろうか。直接目的語の指示対象＜バター＞は、動詞が表す行為＜塗る＞の前の局面ですでに存在しているモノであり、＜塗る＞はそれに対して行われるコトなので、＜被行為主＞とは言えそうである。しかし、Washio(1997: 17)が鋭く指摘しているように、(3a)は動詞が表す行為の結果「バターが厚くなった」ことを表しているわけではないので、＜バター＞が＜状態変化主＞であるとは言い難い。むしろ、その後の研究で指摘されているように、「厚く」が表しているのは＜塗る＞という行為によって生まれたモノ＜バターの層＞のサマであるので、それらは(広い意味では)産物指向と言った方がよい(井本 2003, 2006, 2007, 2009; 斉木 2004; 岩田 2006, 2009; Iwata 2006, 2008; 宮腰 2007a/b/c, 2009等を参照)。しかし、それだけでは作成動詞の内項として統語的に実現する産物のサマを表す(14)「花子がケーキを美味しく作った/

一郎が庭に穴を深く掘った」の「美味しく/深く」のような「結果句」との区別ができないので、(3a)の＜バターの層＞のようなモノは「副産物」と呼び、そのサマを表す「厚く」のような成分を＜副産物指向＞の「結果句」と下位分類する。

ここで注意すべきことが三点ある。まず、＜産物＞と＜副産物＞という用語は、上記の文法的理由で導入されたものであり、常に両者を概念的に峻別することができると主張しているわけではない。例えば、(18a/b)の「厚く/小さく」は＜肉のスライス/ケーキのピース＞のサマを描写しているが、これらの文が表している行為はまさにそれらを産出することを意図したコトであるため、概念的には、そのモノは「副産物」というよりはむしろ「産物」と言った方がふさわしいかもしれない。

(18)　a.　夏子が肉を厚く切った。
　　b.　秋子がケーキを小さく切った。　(Washio 1997: 18; 一部改変)

しかし、文法的には、上で述べた意味での両者の線引きは次のような経験的帰結をもたらすので必要である。

(14′)　a.　花子が美味しいケーキを作った。　(≒(14a))
　　b.　一郎が庭に深い穴を掘った。　(≒(14b))
(18′)　a.　夏子が厚い肉を切った。　(≠(18a))
　　b.　秋子が小さなケーキを切った。　(≠(18b))

(14)タイプの「結果構文」は、奥津(1983)の先駆的研究によって指摘されているように、(14′)のような対応する連体修飾関係を含む文と交替可能だが、(18)タイプの文でそれをすると全く異なる意味になる。この違いを説明するには上記の意味での＜産物/副産物＞の区別が必要となる。[28, 29]

次に、副産物指向の「結果構文」は、先行研究で「疑似結果構文」として取り上げられてきた(3a)/(18)のようなタイプよりも外延がかなり広いことにも注意されたい(「疑似結果構文」の詳細なタイプ指定はWashio(1997: 16-20)を参照)。例えば、影山(1996: 236-240)が「結果様態」と呼ぶ(3b)「春子が器にねぎを平らに並べた」の「平らに」のような成分も、＜並べる＞という行為の対象＜一つひとつのねぎ(の切片)＞ではなく、その行為の結果生まれた＜ねぎ(の切片)の集合＞という高次のモノのサマを表しているので、副産物指向の「結果句」の一例と言える。

次のような自動詞ベースの結果文の「結果句」も同様である。

(19)　a.　雪が庭に厚く積もった。
　　b.　学生が校庭にまっすぐに並んだ。　(矢澤 2000: 207; 一部改変)

(19a)の「厚く」は庭に雪が積もった結果生まれた＜雪の層＞のサマを、(19b)の「まっすぐに」は学生が校庭に並んでできた＜学生の列＞のサマをそれぞれ描写しているので、どちらも副産物指向の「結果句」と言える。

今取り上げた例はいずれも、直接目的語や主語として実現する項名詞句が単独で

指すモノが動詞の表すコトの影響を受けて集合化/分割化し、その副産物のサマが「結果句」によって描写されるというタイプの文であったが、次の例はさらに複雑な意味計算を要する副産物指向の「結果構文」である。

(20)　a.　二郎が壁に写真を大きく飾った。　(川野 2003: 40; 一部改変)

　　b.　三郎がコップを水でなみなみと満たした。(川野 2009: 54; 一部改変)

川野(2003, 2009)が指摘しているように、(20a)で「大きく」が表しているのは<写真>の絶対的サイズではなく、<壁に写真を飾る>という行為の結果生まれたモノ<壁を背景にした写真>の壁に対する相対的サイズである。それも結果相における副産物のサマには違いないが、そのモノは直接目的語の指示対象でもそれが集合化/分割化されたモノでもなく、それとニ格名詞句の指示物とがそれぞれ概念的に図(figure)と地(ground)の関係になるように統合された高次のモノの中における、地に対する図のサマであるという点で、上記の例とは複雑度のレベルが全く異なる。(20b)の「なみなみと」も、水をコップに入れた結果相における、コップに対する水のサマを表しており、副産物指向の「結果句」の一種と言えるが、その図/地となる二つのモノを指す名詞句(「水」と「コップ」)がそれぞれデ格とヲ格になっている点で(20a)とは異なっている。いずれにしろ、この種の文は、結果相におけるモノのサマを表している非動詞成分があるにも関わらず、多くの先行研究では完全に「結果構文」の範疇から除外されてきたが、本稿の分析では副産物指向の「結果構文」と位置づけられる。[30]

三つ目の注意点として、今述べたこととは逆の方向のこと――すなわち、副産物指向の「結果構文」の外延は、いわゆる「疑似結果構文」のそれよりかなり広いが、逆に後者の例が前者の範疇に入らない可能性もあるということ――についてふれておく。次の文は「疑似結果構文」の代表例であり、それに対して上で挙げた先行研究はほとんど(用語は異なるが本質的には)同じ分析――「かたく」が表しているのは被行為主<靴紐>のサマではなく、それを結んだ結果できた副産物<結び目>のサマであるという分析――をしている。

(21)　a.　四郎が靴紐をかたく結んだ。　(Washio 1997: 18; 一部改変)

確かにその分析は可能であるが、この文の「かたく」が表しているのは、副産物のサマというよりはむしろ、動詞「結ぶ」のLCSの結果相にあらかじめ指定してある被行為・状態変化主のサマTIEDが内在的に持つスケール<締まり具合・結びつきの強さ/弱さ(tightness/looseness)>の値――つまり、サマのホド――ではないだろうか。[31] そして、「結ぶ」が表すサマと「かたく」が表すホドとが共同で<かたく結ばれた>という高次のサマを構成し、それが<靴紐>というモノの、結果相におけるサマを表しているとみなすことができる。

この分析は、少なくとも四つの証拠によって支持される。まず、(21a)と(21b)を比

較してみよう。

(21)　b.　四郎が靴紐をきつく結んだ。

(21b)は(21a)とほぼ同義だが、「結び目がきつい」とは言えない――少なくとも、完全に容認可能ではない――ので、(21b)の「きつく」に副産物指向分析を適用することは難しい。したがって、(21a)の「かたく」を副産物指向の「結果句」と分析すると、(21a)と(21b)の同義性を一貫してとらえられないことになる。一方、上で示した代案では、どちらも＜締まり具合・結びつきの強さ/弱さ＞の値を表す成分として記述できるので、記述の一貫性という点で望ましいと思われる。

今指摘したのは、ある動詞に対してほぼ同じ連用修飾関係を結ぶ複数の成分を記述する際の一貫性についてだが、逆に、複数の動詞に対してほぼ同じ連用修飾関係を結ぶ成分を記述する際の一貫性という観点からも、上記の代案を支持する議論ができる。今度は(21a)と次の文を比較してみよう。

(22)　a.　五郎が蛇口/ドアをかたく閉めた。

　　b.　一郎が花子の手をかたく握った。

(22a/b)の「かたく」は共に、(21a)のそれと同様に、＜締(閉)まり具合・結びつきの強さ/弱さ＞の値を表す副詞として解釈できる。したがって、上記の代案を採れば、動詞が異なるそれらの例の非動詞成分をすべて一貫して記述できる。一方、蛇口/ドアを閉めても手を握っても何もモノは生まれないので、副産物分析は(22a/b)には適用できず、それらと(21a)を首尾一貫した形で記述することができない。

非動詞成分「かたく」と動詞「結ぶ」をそのままにして、結ばれるモノを表す内項を次のような抽象名詞句に替えた場合も、やはり結び目のようなモノは生まれないので副産物指向分析を適用することはできないが、代案ではその意味も無理なくとらえられる。

(23)　a.　家族の絆がかたく結ばれた。

　　b.　二郎と良子の心はかたく結ばれている。

このように、記述の一貫性という観点から「かたく」や「結ぶ」を含む表現を丁寧に検討してみると、「疑似結果構文」の代表例(21a)は代案のように分析した方が望ましいという結論に至る。

さらに、サマのホド分析は、「かたく」や「結ぶ」といった特定の語を含む結果表現とは独立の証拠によっても支持される。というのは、日本語にはサマとそのホドとが高次のサマを形成し、それ全体が結果相におけるモノのサマを表しているとしか考えられない結果表現が数多く存在するからである。例えば、4節で挙げた(10b/c)「四郎が[甘さを控えめに]ケーキを作った/五郎が[厚さを3ミリに]肉を切った」などはその例である――＜甘さ/厚さ＞はそれぞれモノ(ケーキ/肉のスライス)のサマを表し、＜控えめ/3ミリ＞はそのホドを表し、それら全体で高次のサマ＜甘さ控え

め/厚さ３ミリ＞を構成しているとしか解釈できない。つまり、サマのホド分析は、(21a)「四郎が靴紐をかたく結んだ」のような特定の文のためだけにアド・ホックに仮定されたわけではなく、独立に動機づけられた分析なのである。

この分析の帰結として、従来「疑似結果構文」としてまとめられていた結果文には、少なくとも三つの異質な結果表現が含まれていることになる。一つ目は統語的に表れない副産物のサマを表す成分を含むタイプ(例えば(18a)「夏子が肉を厚く切った」)、二つ目は内項として実現する被行為・状態変化主のサマのホドを表す成分を含むタイプ(例えば(21a)「四郎が靴紐をかたく結んだ」)、そして三つ目は副産物のサマのホドを表す成分を含むタイプ(例えば(10c)「五郎が[厚さを３ミリに]肉を切った」)である。そして、(７)の定義「結果表現とは結果相における状態を表す表現である」に基づけば、いずれも文全体としては結果表現と言えるが、非動詞成分のレベルでそう言えるかどうかは(７)の「状態を表す」の部分をどう解釈するかによる。一つ目のタイプは、問題の成分がモノのサマを直接表しているので問題ないが、残り二つは、それが表しているのはモノのサマのホドであるため、単独で「状態を表している」とは言い難い。ただし、「状態の一部」は表している上に、他の成分(動詞や名詞)と共同では「結果相における状態を表している」と言えるので、完全に「結果句」の枠から外れてはいない。この問題は後ほど再びふれるが、少なくとも、ここでの議論は「疑似結果構文」の位置づけに再考を促すという含意はもたらすであろう。

5.4　(被行為・)位置変化主指向

では元に戻って、モノの側からの「結果句」・「結果構文」の分類を続けよう。ここまで見てきた例はほとんど、動詞が狭い意味での状態変化を表しているタイプだったが、井本(2003, 2007)や宮腰(2007b/c, 2009)等で指摘されているように、位置変化を表す動詞でも結果相におけるモノのサマを表す成分と共起することができる。例えば、(24a)の「裏返しに」は変化事象の結果相におけるモノのサマを表しており、動詞によって要求された成分ではないので「結果句」と言えるが、その事象は狭い意味での＜状態＞ではなく＜位置＞の変化であり、その指向先のモノ(名刺)は＜状態変化主＞でも＜(副)産物＞でもなく＜位置変化主＞である(それは動詞が表す事象の初期相において必ずしも裏返しでなかったわけではない――したがって、状態変化主とは言えない――という点に注意)。したがって、この文の「結果句」は＜位置変化主指向＞と言える。

(24)　a.　床に名刺が裏返しに落ちた。

　　b.　三郎が机にコップを逆さまに置いた。

(24b)は、コップの位置変化が三郎による行為によって引き起こされた＜行為・位置変化事象＞を表しており、「逆さまに」はコップの結果相におけるサマを描写して

いるので、<被行為・位置変化主指向>の「結果句」となる。ここでも、コップは初期相の局面で必ずしも逆さまでなかったわけではない――したがって、コップが状態変化をしていなくても(24b)は真となり得る――という点に注意されたい。

ただし、<位置変化>と<状態変化>も常にはっきり区別できるわけではなく、両者がまとまって一つの事象を構成しているとみなされるタイプの変化もある。例えば、次の文の「仰向けに/裏返しに」はそれぞれ四郎/帽子の結果相におけるサマを表しているが、動詞「倒れる/かぶる」(を含む文)が描写しているのは<位置変化>とも<状態変化>ともみなすことができる、両者が一体となった変化事象と言える。

(25)　a.　床に四郎が仰向けに倒れた。

　　b.　五郎が頭に帽子を裏返しにかぶった。

(25a)は、主体の一部(四郎の頭や胴体など)の空間上の位置は変化しているので<位置変化>とも言えるが、主体全体の変化としては<位置>というよりはむしろ<体勢>の変化なので<状態変化>とも言える。(25b)は、被行為主<帽子>に着目すれば<位置変化>と言えるが、行為主<五郎>に着目すれば<状態変化>とも言える。さらに言えば、(3a)「三郎がパンにバターを厚く塗った」も(ナイフですくわれた)バターがするのは<位置変化>だが、パンの上のバターの層の出現は広い意味の<状態変化>であるし、典型的「結果構文」の一例としてよく挙げられる「一郎が壁を白く塗った」のような文でさえ、ペンキの<位置変化>と壁の<状態変化>が一体となった変化事象を表している。本稿ではこの問題にこれ以上立ち入らないが、この種の事象を厳密に記述するには<位置変化>と<状態変化>の両方を並行的に表示できる事象構造が必要であるという点だけは指摘しておく。

5.5　行為・状態/位置変化主指向

次の例の「お腹いっぱいに/後向きに」は、動詞の表す行為・変化の結果相における<一郎/春夫>の状態を表しているが、それらはいずれも<おにぎりを食べる/ホームに降りる>という行為をする主体<行為主>であるだけでなく、その行為の影響が自分自身に及ぶことによってある領域<胃の満たされ具体/空間上の位置>の変化をしているので、それぞれ<状態変化主/位置変化主>でもあるとみなすことができる(ここでもまた、(26b)の<行為主>(春夫)は降りる前から後向きであってもよい――つまり、狭い意味での状態(サマ)は変化していなくてもよい――点に注意)。

(26)　a.　一郎がおにぎりをお腹いっぱいに食べた。(宮腰 2006: 8; 一部改変)

　　b.　春夫がホームに後向きに降りた。　　(井本 2003: 66; 一部改変)

したがって、(26a/b)の非動詞結果成分はそれぞれ<行為・状態変化主>/<行為・位置変化主>指向の「結果句」と言える。そして、<行為・状態/位置変化主>は行為・変化動詞の主語として統語的に実現される外項なので、このタイプの「結果句」はい

わゆる「直接目的語(あるいは内項)の制限」の反例となる。[32]

次の例の「かっこよく/まっすぐに」も結果相における行為・状態/位置変化主のサマの描写に寄与しているが、その描写の仕方という点では上の例に比べて少し間接性が高い。

(27) a. 二郎がスーツをかっこよく着た。(宮腰 2007c: 111; 一部改変)

b. 三郎がまっすぐに立ち上がった。

(27a)の「かっこよく」は(6節で議論するコトのサマの読みを除いても)三通りの解釈ができる。一つは、<見栄え/身なり>という領域において、二郎のサマがスーツを着る前と後で変化し、その結果相のサマがかっこよいという読みである。この解釈では、「かっこよく」は直接的に二郎のサマを表しているとみなせるので、(26a)の「お腹いっぱいに」と同種の「結果句」と言える。もう一つは、<スーツを着る>という行為の結果、二郎とスーツが一体となって生まれたモノがかっこよいという解釈であり、これは<副産物指向>の読みと言える。しかし、この例はタイプ的に5.3節で見た副産物指向の「結果句」とは大きく異なる。上で見た副産物指向の「結果句」はいずれも、<被行為・状態変化主>——例えば(18a)「夏子が肉を厚く切った」なら<肉>——を基に生まれたモノのサマを表しているのに対して、(27a)の「かっこよく」は<行為・状態変化主>(二郎)が意味的主要部となってできたモノのサマを表しているからである(かっこよいのは二郎が着たスーツというよりはむしろ、スーツを着た二郎である)。三つ目は、二郎の<見栄え/身なり>がかっこよいという読みである。この解釈では、「かっこよく」はモノ<二郎>のサマを直接表しているのではなく、モノのサマ<見栄え/身なり>のサマを表していることになるので、(21a)「四郎が靴紐をかたく結んだ」の「かたく」と同様に、それを「結果句」と言えるかどうかは(7)の定義「結果表現とは結果相における状態を表す表現である」の「状態を表す」の解釈次第である。この問題は6節で議論するが、少なくともここで言えることは、(27a)の「かっこよく」がサマ<見栄え/身なり>のサマを表していると解釈したとしても、結局その高次のサマが表しているのは、結果相における<行為・状態変化主>(二郎)の状態——つまり、「(スーツを着るという行為・変化事象の結果相において)二郎は、見栄え/身なりがかっこよい」ということ——である。要するに、この細かく分けた三つの解釈のどれを採っても大きな意味の違いはない。そして、そのうちのどれかを否定する強い証拠もないので、本稿では(27a)も<行為・状態変化主指向>の「結果構文」の一例とみなしておく。

(27b)を見ると、モノのサマ描写の間接性がよりはっきりわかる。この例の「まっすぐに」は結果相における<三郎>のサマを直接的に表しているとは言い難い。「(立ち上がった)三郎がまっすぐだ」は、特別な文脈がない限り、意図された解釈にならないからである。この場合は、「(立ち上がった)三郎は、姿勢がまっすぐだ」とい

うサマ＜姿勢＞のサマの読みしかないであろう。ただしここでも、結局その高次のサマ＜姿勢がまっすぐ＞は結果相における＜行為・状態変化主＞――外項の＜三郎＞――の状態を表しているという点は同じである。

今見た二例はいずれも描写されるサマ――(27a)の＜見栄え/身なり＞と(27b)の＜姿勢＞――が非明示的なタイプだが、それが統語的に明示されているタイプもある。

(28)　a.　花子が見栄えを華やかにメイク・アップした。

　　b.　良子が髪型をきれいに整えた。

これらの例の「華やかに/きれいに」はどちらもサマのサマを表しているが、その描写されるサマ＜見栄え/髪型＞はいずれも統語的に名詞句として実現している。しかも、(28b)の＜髪型＞は動詞の内項であり、目的語として現れている。しかしこれらも、サマとサマで高次のサマ＜見栄えが華やか/髪型がきれい＞を形成し、全体として結果相における＜行為・状態変化主＞――外項の＜花子/良子＞――の状態を表しているという点は上の例と同じである。

ちなみに、この種の結果表現――結果相におけるモノのサマが高次のサマであるタイプ――はすでに挙げた例にも含まれており、それらにおけるモノはここで挙げた例のモノとは意味役割が違うという点にも注目されたい。例えば(10a)「三郎が見た目をきれいに壁を塗った」の「きれいに」はサマ＜見た目＞のサマを表しており、それら全体は＜行為・状態変化主＞ではなく＜被行為・状態変化主＞(壁)のサマを描写しており、(10b)「良子が甘さを控えめにケーキを作った」の「控えめに」はサマ＜甘さ＞のホドを表しており、それら全体は＜産物＞(ケーキ)のサマを描写している。

5.6　まとめと課題

本節は、「結果構文」をその非動詞結果成分「結果句」の意味役割的指向性という観点から大きく五つのタイプに分類した。[33]

(29)　a.　(被行為・)状態変化主指向：(1)、(3c)、(13)、(15a)、(16a)、((10a)、(21)～(23))

　　b.　産物指向：(14)、(15b)、(16b)、((10b))

　　c.　副産物指向：(3a/b)、(18)～(20)、((10c))

　　d.　(被行為・)位置変化主指向：(24)、(25)

　　e.　行為・状態/位置変化主指向：(26)、((27)、(28))

この分類によって、「結果構文」の一側面――「結果句」の表すモノのサマのモノの側の特性――はある程度見えてきたが、サマの側はまだわずかしか明らかになっていない。また、「結果句」が表しているのは結果相におけるモノのサマ(のサマ/ホ

ド)のみであるかという問いも、ここまでの議論とは別に検討される必要がある。さらに、「結果句」の文法的位置付けに関する問題――具体的には、(i)「結果句」は副詞か、述語か、その両方か、いずれにしろ(ii)それはどのような意味での副詞/述語なのかという問題――もまだ残されている。そこで続く二つの節(6・7節)では、これらの問題を検討し、「結果句」を意味・機能的に特徴づけ、それを支持する経験的証拠を提示する。

6.「結果句」の意味・機能と文法的位置づけ

本稿は、「結果句」を意味・機能の観点から次のように規定する。

(30)「結果句」とは、結果相におけるモノのサマ(またはモノのサマのサマ/ホド)の描写を通して、動詞成分の表すコトのサマ/ホドを限定する述語的副詞である。

ここでの「副詞」とは、品詞/文法範疇としての副詞(adverb)という意味ではなく、連用修飾成分(adverbial)という意味である。「AがBを修飾する」とは、Aが随意的にBの意味を限定することであり、意味を限定するとは、情報量/内包を大きくして外延を小さくすることである。そして、連用修飾の制約の一つとして、(31a)を仮定する。

(31) a. 副詞は動詞の固有の意味部分を優先的に限定する。
　　b. 結果相におけるモノのサマ(またはモノのサマのサマ/ホド)とそのモノを含むコトのサマ/ホドの間には内在的な相関関係がある。

「固有の意味部分」とは、その語のLCSにおいて定項(constant/root)としてあらかじめ指定してある意味成分のことである。この規定により、結果動詞の固有の意味部分は結果相における状態にあるため、結果動詞を修飾する副詞は、他の条件を満たしている限り、その部分の意味を限定することになる。さらに(31b)を仮定すると、モノのサマ(のサマ/ホド)の描写が、その内在的リンクを通して、コトのサマ/ホドの限定につながることになる。これは言い換えると、結果相においてモノがどのようなサマになるかはそのモノを含むコトがどのように/どの程度なされたかに拠るということである。[34]

「述語」とは、項と共に命題を形成する文成分であり、「述語的副詞」とは、述語機能を内包した副詞という意味である。「良子が部屋をきれいにした」や「部屋がきれいになった」の「きれいに」のように、述語であり、かつ補語である「述語的補語」があるのだから、述語であり、かつ副詞である「述語的副詞」があっても、文法的位置づけとしては不思議ではないであろう。

この、結果句の持つ副詞性と述語性は、まとめて次のように表示できる。

(32)

「結果句」
- 副詞性
  - (i)結果相におけるモノのサマ(のサマ/ホド)描写
  - ＋
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ/ホド限定
- ＋
- 述語性
  - (iii)述語(項)＝命題

また、副詞性と述語性にはそれぞれ程度があり、その程度に応じて、結果句には副詞性の強いタイプから述語性の強いタイプまで多様性がある。さらに、副詞成分と述語成分にずれがあるタイプもある。

これらの点を、以下、前節で提示した五つのタイプに分けて具体的に実証する。

まず、基本的「結果構文」の被行為・状態変化主指向タイプから始めよう。例えば(1c)「花子が髪を黒く染めた」の場合、非動詞成分「黒く」は動詞「染める」の固有の意味情報DYEDをさらに詳しく描写し、それを通して「どのように染めたか」というコトのサマを限定しており、かつ、「髪」を項として取り、「髪が黒い」という結果相の状態を表す命題を形成しているので、(30)の規定をほぼ満たしている「結果句」と言える(限定副詞「ほぼ」がつけてある理由はすぐ後で述べる)。それを(32)のフォーマットで表すと次のようになる。

(33)

「黒く」
- 副詞性
  - (i)結果相におけるモノ(被行為・状態変化主)のサマ描写
  - ＋
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
- ＋
- 述語性
  - (iii)BLACK(HAIR)[結果相の状態]

ただし、ここで注意すべき点が二つある。一つは、「－ク」は単独では述語になれない形式であるため、完全な述語とは言い難く、これは後ほど取り上げる他の形式の結果句にも一貫して見られる特性であるので、日本語「結果句」の述語性は全般的に低い、という点である。もう一つは、「コトのサマ」――つまり「様態」――の意味・用法を二つに分ける必要があるという点である。「黒く」が動詞の表すコトのサマを限定しているということは、それが様態副詞でもあるということになるが、結果句は普通の意味の様態副詞と全く同じというわけではもちろんないので、その違いを明確にする必要がある。(34)に示したように、一つは、ウゴキの速さ、強さ、丁寧さなど、普通の意味の様態であり、「速く走る」の「速く」や「ボールを軽く打つ」の「軽く」などはこの意味の様態を表している。もう一つは、「モノがあるサマになるようにVする」という意味の様態であり、結果句はこのタイプの様態副詞である。

(34)

コトのサマ
- (a)狭い(普通の)意味の様態:ウゴキの速さ、強さ、丁寧さ等
- (b)広い意味の様態:[[モノがあるサマになる]ように]Vする

(i)⇨(iii)　(ii)

加藤(2007)が指摘しているように、「髪を黒く染めた」のような結果表現は、「髪を黒くなるように染めた」とパラフレーズできるが、それは「どのように染めたか？」という疑問文への的確な答えとなることからもわかるように、コトのサマを表していると解釈できる。[35] ただし、それは手の動きや丁寧さのような狭い意味の様態ではなく、「結果として被行為・状態変化主の色が黒くなるようなやり方で」という意味の様態である。つまり、結果相におけるモノのサマを黒と指定することは、(31b)で述べた内在的リンクを通して、「そうなるように行為をした」というコトのサマの限定になる、というのがこの分析のポイントである。

状態変化主指向の(13a)「苺が甘く熟した」の場合は、動詞「熟す」に＜甘さ＞というスケールが内在的に含まれており、「甘く」はそのスケールの標準値(または話者の主観的体感値)を指定しているタイプと言える。[36] したがって、この種の結果句が表しているのは、結果相におけるモノのサマというよりはむしろ、そのサマのホドであり、それを通して、動詞の表すコトのホド(どの程度熟したか)の限定をしていると言える。それを(32)のフォーマットで表すと次のようになる。

(35)

「甘く」
- 副詞性 + 述語性
  - (i)結果相におけるモノ(状態変化主)のサマのホド指定
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのホド限定
  - (iii)RIPE-SWEET(STRAWBERRY)[結果相の状態]

コトやサマのホドとは、言い替えれば「程度」であるため、この種の結果句は程度副詞ということになる。ただし、様態副詞の場合と同様に、コト/サマのホドのみを表す普通の程度副詞とは質的に違うので、(36)のように二つの意味を区別する必要はある。

(36)

コトのホド
- (a)狭い(普通の)意味の程度:コトの量・サマの度合い
- (b)広い意味の程度:[[モノがあるサマになる]ほど]Vする

(i)⇨(iii)　(ii)

残り四つのタイプ(29b～d)もほぼ同様に記述・説明できる。例えば、産物指向の(14a)「花子がケーキを美味しく作った」の「美味しく」も、(14b)「一郎が庭に穴を深

く掘った」の「深く」も、結果相におけるモノのサマ描写を通してコトのサマ・ホド限定をし、かつ、項名詞句と共に命題を形成しているので、述語的副詞と言える。「髪を黒く染める」タイプとの違いは、結果句の指向先のモノが、動詞の表す事象の初期相から存在している被行為・状態変化主ではなく、結果相で初めて生まれる産物であるという点にある。

(37)

「美味しく」:
- 副詞性 +
  - (i)結果相におけるモノ(産物)のサマ描写
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
- 述語性
  - (iii) DELICIOUS(CAKE)[結果相の状態]

(38)

「深く」
- 副詞性 +
  - (i)結果相におけるモノ(産物)のサマ描写
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのホド限定
- 述語性
  - (iii) DEEP(HOLE)[結果相の状態]

いわゆる「疑似結果構文」には、5.3節で指摘したように、「結果句」が副産物のサマ(のホド)を表すタイプと被行為・状態変化主のサマのホドを表すタイプがあるが、本稿の分析ではそれらも一貫して記述・説明できる。例えば、(3b)「春子が器にねぎを平らに並べた」の「平らに」は、ねぎを器に並べた結果できるねぎの集合という高次のモノのサマと、そうなるように並べたというコトのサマを表しており、(21a)「四郎が靴紐をかたく結んだ」の「かたく」は、動詞「結ぶ」のLCSの結果相にあらかじめ指定してあるサマTIEDが内在的に持つスケール<締まり具合・結びつきの強さ/弱さ>の値——サマのホド——を指定することによって全体で高次のサマ——サマTIEDとその値TIGHTによって構成されるサマ——を表し、それを通して、靴紐がそのようなサマになるように結んだというコトのサマも表しているので、それぞれ次のように記述できる。

(39)

「平らに」
- 副詞性 +
  - (i)結果相におけるモノ(副産物)のサマ描写
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
- 述語性
  - (iii)FLAT(LEEKS ARRANGED ON PLATE)[結果相の状態]

高次のモノ

(40)

「かたく」
- 副詞性 + 述語性
  - (i)結果相におけるモノ(被行為・状態変化主)のサマのホド描写
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
  - (iii)TIED TIGHT(SHOELACES)[結果相の状態]

高次のサマ

ただし、これらはいずれも「結果句」とその指向先のモノを表す名詞句が直接的な叙述関係を形成していない――(39)では高次のモノが統語的に明示されておらず、(40)の「結果句」は高次のサマの一部でしかない――という点で、この種の「結果構文」の述語性は上記の２タイプ――(被行為・)状態変化主指向と産物指向――よりもさらに低いと言える。[37]

(24a/b)「床に名刺が裏返しに落ちた/三郎が机にコップを逆さまに置いた」のような(被行為・)位置変化主指向の「結果句」も、モノが結果としてあるサマになるように位置変化をした/させたということを表しているので、やはり結果相におけるモノのサマ描写を通してコトのサマ限定をしている述語的副詞となる。

(41)

「裏返しに」:
- 副詞性 + 述語性
  - (i)結果相におけるモノ(位置変化主)のサマ描写
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
  - (iii)UPSIDE-DOWN(NAME CARD)[結果相の状態]

(42)

「逆さまに」:
- 副詞性 + 述語性
  - (i)結果相におけるモノ(被行為・位置変化主)のサマ描写
  - +
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
  - (iii)UPSIDE-DOWN(CUP)[結果相の状態]

この分析はさらに、行為・状態/位置変化主指向タイプにも適用できる。例えば、(26a)「一郎がおにぎりをお腹いっぱいに食べた」の「お腹いっぱいに」は、行為主でもあり、かつ状態変化主でもある一郎の、結果相におけるサマと、彼がおにぎりをどの程度食べたかというコトのホドを表し、かつ、彼がお腹いっぱいであるという、結果相の状態を表す命題を形成しており、(26b)「春夫がホームに後向きに降りた」の「後向きに」も、行為主であり、かつ位置変化主でもある春夫の、結果相におけるサマを描写し、それを通して、そうなるようにホームに降りたというコトのサマを限定し、かつ、その局面において、彼は後向きだという命題を形成しているので、どちらも述語的副詞と言える。

(43)

「お腹いっぱいに」：
- 副詞性 ＋ 述語性
  - 副詞性：(i)結果相におけるモノ(行為・状態変化主)のサマ描写
  - ＋
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのホド限定
  - 述語性：(iii)FULL(ICHIRO)[結果相の状態]

(44)

「後向きに」：
- 副詞性 ＋ 述語性
  - 副詞性：(i)結果相におけるモノ(行為・位置変化主)のサマ描写
  - ＋
  - (ii)(i)を通して、動詞成分の表すコトのサマ限定
  - 述語性：(iii)BACKWARD(HARUO)[結果相の状態]

このタイプの「結果句」は、5.5節で指摘したように、いわゆる「直接目的語/内項の制限」の反例となっている点に注意されたい。この見解に対して、いくつかの先行研究(例えば影山 2009: 105; 松井・影山 2009: 275)は、この種の成分は(i)行為の程度を表す副詞であり、(ii)結果相における主語(外項)の指示物の状態を表しているわけではないと主張しているが、(i)は以前から繰り返し指摘されており(宮腰2007b/c, 2009を参照)、(ii)は日本語話者の判断と整合しない——例えば(26a)で＜お腹いっぱい＞という状態になるのは主語(外項)の指示物である＜一郎＞以外に考えられない。[38, 39] さらに言えば、問題の成分を程度副詞とみなすだけでは(26b)「春夫がホームに後向きに降りた」タイプの文は扱えないので、影山らの分析はその点でも再考の必要がある。

行為・状態変化主指向の中には、(27)/(28)「二郎がスーツをかっこよく着た/三郎がまっすぐに立ち上がった/花子が見栄えを華やかにメイク・アップした/良子が髪型をきれいに整えた」のように、「結果句」と主語/外項の叙述関係が間接的なタイプもあるが、本研究は、(45)/(46)に示すように、この種の「結果句」はモノ(行為・状態変化主)のサマのサマを表し、それによって構成される高次のサマ(身なりがかっこよい/姿勢がまっすぐ/見栄えが華やか/髪型がきれい)が全体で主語/外項を叙述し、かつ、動詞を連用修飾していると分析することによって、上で挙げた他の結果表現との共通点と相違点を捉えながら首尾一貫した記述・説明ができる。

(45)「かっこよく/まっすぐに」: モノ(二郎/三郎)のサマ(身なり/姿勢)のサマ描写

(46)「華やかに/きれいに」: モノ(花子/良子)のサマ(見栄え/髪型)のサマ描写

主語/外項の指示物：行為・状態変化主　　高次のサマ

7.「結果句」の副詞性と述語性

前節では、「結果句」を「結果相におけるモノのサマ(またはモノのサマのサマ/ホド)の描写を通して、動詞成分の表すコトのサマ/ホドを限定する述語的副詞である」と規定し、それを五種類の「結果構文」に基づいて実証したが、本節では「結果句」の副詞性と述語性の程度について議論する。具体的には、日本語「結果句」は全般的に副詞性の方が圧倒的に強いが、述語性も同時に内包していることを、それぞれ経験的証拠を挙げながら論証する。

日本語「結果句」が副詞(連用修飾成分)であることを示す証拠は、少なくとも八つある。まずは、形式である。すでに指摘したように、日本語「結果句」は、形容詞語幹＋クであれ名詞/形容名詞の語幹＋ニであれ、単独では述語になれない形式である。[40] 二つ目は、生起の随意性である。連用形というだけでは動詞によって義務的に要求された成分との区別ができないが、日本語「結果句」の生起はすべて随意的なので、その点で補語とは決定的に異なる。[41] そして、意味解釈の上でも、前節で詳述したように、日本語「結果句」はすべて動詞成分の意味をモノ/コトのサマ/ホドの点で限定しているので、先に挙げた修飾の定義の一要件「Aが随意的にBの意味を限定する」に完全に合致している。

四つ目の証拠として、談話上の機能が挙げられる。「結果構文」は、次に示されるように、「どのように/どのくらいVしたか」という疑問文への的確な答えとなり得るので、「結果句」は広い意味での様態副詞/程度副詞であると言える。

(47)　Q：花子はどのように髪を染めたの？　　A：黒く染めた。
(48)　Q：一郎はどのくらいおにぎりを食べたの？　A：お腹いっぱいに食べた。
(49)　Q：苺はどのくらい熟したの？　　A：とても甘く熟した。

副詞性の五つ目の証拠は、(50)のように「結果句」は同格成分としていくつも並べられるという事実であり、六つ目の証拠は、(51)のように他の副詞(狭い意味の様態副詞)と共に同格連用修飾ができるという事実である。[42]

(50)　a.　春子が壁を白く美しく塗った。
　　a′　*春子が壁を白くて美しく塗った。
　　b.　夏子が野菜を細かく小さく薄く切った。
　　c.　秋子がケーキを大きく丸く美味しくヘルシーに作った。
(51)　a.　冬子が壁を丁寧に白く塗った。
　　b.　魚を素早く美しく開く大会(TVニュース)

また、上で挙げた(10a/b/c)「三郎が[見た目をきれいに]壁を塗った/四郎が[甘さを控えめに]ケーキを作った/五郎が[厚さを３ミリに]肉を切った」の非動詞結果成分はいずれも句ではなく非時制節であるが、節全体としては(i)結果相における

モノ(被行為・状態変化主/産物/副産物)のサマと(ii)そうなるように壁を塗った/ケーキを作った/肉を切ったというコトのサマを表している——つまり、連用修飾機能を果たしている——ので、副詞分析を支持するさらなる証拠とみなすことができる。ちなみに、(52a/b/c)のように、句と節、または節と節でさえ同格連用修飾成分として並べられる。

(52)　a.　四郎がケーキを美味しく[甘さを控えめに]作った
　　b.　五郎が肉を、[厚さを３ミリに]均等に切った。[43]
　　c.　春子が餃子を[外はパリパリに]、[中はジューシーに]焼いた。

八つ目の証拠は、(53)のような、いわゆる「誇張読み」の文である。

(53)　a.　夏子が[身を粉に]働いた。
　　b.　秋子が[口を酸っぱく]言った。

本稿のように「結果構文」はもともとコトのホドを表していると分析すれば、「そうなるほど」の部分が比喩的に拡張することによって、括弧の部分が程度のみを表す(53)タイプの文ができると考えられるが、「結果構文」に全く程度の意味が入っていないなら、両者の関係をうまくとらえられない。したがって、このような派生的な文との関係づけという観点からも、本研究の副詞分析は支持される。

このように、副詞性を示す証拠は数多くあるので、日本語「結果句」の副詞性の程度は全般的に高いと言える。一方、述語性は、項と共に命題を形成するという意味的条件はほとんど満たしているが、形式的にはすべて(単独で述語になれないという意味で)不完全であるため、全般的には低い。そして、まさにその連用形という形式が示しているように、結果句と項とのつながりはあくまで動詞を介してのものであり、典型的な「結果構文」の中には、「結果句」が動詞を介さずに直接、項を叙述していることを示す証拠は(筆者の知る限り)これまでに一つも提示されてない。[44]

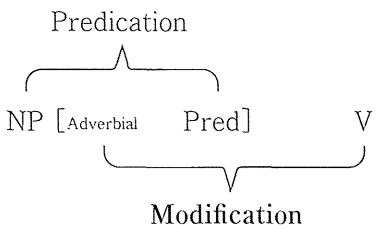
ただし、先行研究では取り上げられていない、非常に周辺的な結果表現の中には、それを示す例がわずかにある。それらはいずれも、副詞成分と述語成分にずれがある結果表現であり、大きく分けて二つのタイプに分類できる。一つは、すぐ上で挙げた、(52)のようなタイプの結果表現である。例えば、(52a)の「控えめに」は直接動詞を修飾しておらず、「甘さ」というサマを表す名詞句と叙述関係を結ぶ述語としか解釈できない。しかし、「甘さを控えめに」全体で高次のサマを形成し、それが動詞「作った」を連用修飾し、かつ、それを介して名詞句(ケーキ)と二つ目の叙述関係を結んでいる。つまりこのタイプは、二重の叙述関係を持つ、いわゆる二重主語構文(cf.「そのケーキは甘さが控えめだ」)に対応する結果表現と言える。もう一つは、4節でふれた、(12a)「枝もたわわに柿が実った」タイプの結果表現である。この文の「たわわ」も、「枝」と叙述関係を結ぶ述語としか解釈できず、「枝もたわわに」全体が動詞「実った」を連用修飾しているので、副詞成分と述語成分にずれがあるタイプで

ある。上のタイプとの違いは、非時制節が別の名詞句と二つ目の叙述関係を形成していないという点にある。

これら二つの周辺的なタイプが典型的タイプと叙述・連用修飾の点でどこが同じでどこが違うのかを図式的に表すと次のようになる。[45]

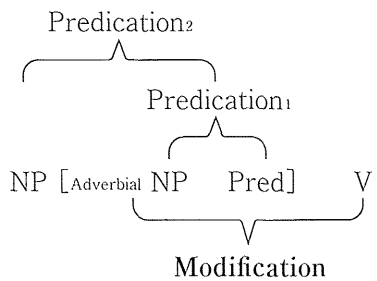
(54)　叙述(Predication)と連用修飾(Adverbial Modification)の関係

a.　典型的タイプ：



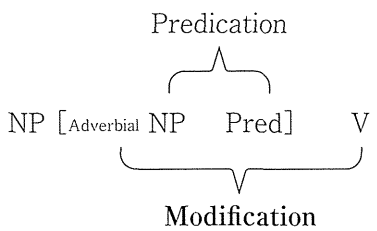
e.g.　髪を　黒く　染める

b.　周辺的タイプ１：



e.g.　ケーキを[甘さを 控えめに]　作る

c.　周辺的タイプ２：



e.g.　柿が [枝も たわわに]　実る

典型的タイプでは、「結果句」が動詞と直接的に連用修飾関係を結び、それを介して間接的に名詞句と叙述関係を形成している。(54)では、連用修飾関係の方が主であることを太字で表している。周辺的タイプでは、「結果句」は存在せず、述語としての機能のみを果たす成分が項と共に非時制節を形成し、それ全体が動詞と連用修飾関係を結んでいる。その、副詞成分と述語成分にずれがある点が二つの周辺的タイプの共通点であり、両者の相違点は、非時制節全体が高次の述語としての機能を果たしているかどうかにある。

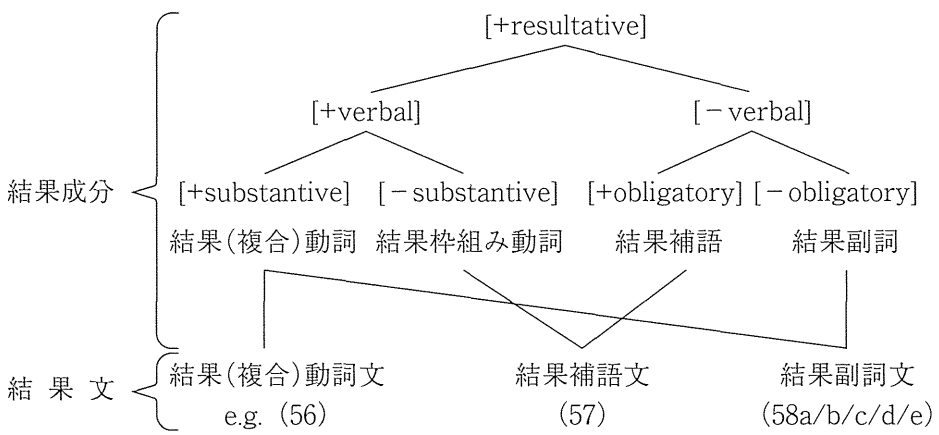
以上の考察から、日本語「結果句」は副詞性の方が圧倒的に強い述語的副詞であ

り、非常に周辺的なタイプでは述語性が単独で表れるが、節成分全体としてはやはり副詞である、という結論が導き出される。ただし、「結果述語的副詞」と言うと長いため、略称として、「結果句」は「結果副詞(resultative adverbial)」と、「結果構文」は「結果副詞文(resultative adverbial sentence)」と呼ぶことにする。その名称も含めて、今後検討を要する課題は数多くあるが、少なくとも本研究によって、いわゆる「結果句」・「結果構文」の特性と文法的位置づけはある程度明らかになったであろう。

8. おわりに：まとめと課題

本稿は、大きく分けて、日本語結果表現の適切な定義・分類と「結果句/結果構文」の意味・機能的特徴づけの二点について考察した。具体的には、まず前半で、キーワードの「結果」を(i)原因に対する概念としての「結果(result)」と(ii)アスペクト局面としての「結果(resultative)」に分けて定義し、後者に基づいて「結果表現」を定義し、結果表現を四つの素性((a)結果性、(b)動詞性、(c)(動詞の意味の)実質性、(d)(非動詞成分の)義務性)によって細かく整理・分類した。それによって、結果表現全体における、いわゆる「結果句/結果構文」の位置づけを明確にした。後半では、日本語「結果構文」は「結果句」の意味役割的指向性という観点から少なくとも五つのタイプに下位分類されることを示し、「結果句」とは意味的には結果相におけるモノのサマ(またはモノのサマのサマ/ホド)と動詞成分の表すコトのサマ/ホドの両方を表す成分であり、機能的には副詞と述語の両方の役割を果たす「述語的副詞」(略して「結果副詞」)であると主張した。さらに、副詞性と述語性には程度があり、日本語の「結果句」は全般的に副詞性の方が圧倒的に強いタイプであることも実証した。この考察から見えてくる日本語結果表現の全体像は、次のようにまとめられる。

(55)日本語結果表現の文/成分レベルの分類



(56) a. 花瓶が割れた。
　　b. 一郎がドアを押し開けた。
(57) a. 部屋がきれいになった。
　　b. 花子が部屋をきれいにした。
(58) a. (被行為・)状態変化主指向：(1)、(3c)、(13)、(15a)、(16a)、((10a)、(21)、～(23))
　　b. 産物指向：(14)、(15b)、(16b)、((10b))
　　c. 副産物指向：(3a/b)、(18)～(20)、((10c))
　　d. (被行為・)位置変化主指向：(24)、(25)
　　e. 行為・状態/位置変化主指向：(26)、((27)、(28))

最後に、残された課題について簡単にふれておく。まず、本稿では「形容詞語幹＋ク形」や「(形容)名詞語幹＋ニ形」の内部構造にまでは踏み込まず、それらをまとめて文の一成分とみなして議論したが、モノのサマ(のサマ/ホド)を表す形容詞や(形容)名詞――例えば「黒」や「粉々」――をコトのサマ/ホドも表す成分に変換しているのは明らかに接辞「－ク/ニ」であるので、その意味・機能を厳密に規定し、それが形容詞/(形容)名詞語幹や動詞等と結びついて文全体の意味が決定されるメカニズムを明らかにする必要がある。[46] そのためには、文の各成分の意味を厳密に構造記述することが求められるであろう。したがって、モノ・コト・サマ・ホド・トコロ等の存在論的カテゴリーに加えて、力動性やアスペクトのような、動詞や文の意味を決定づけるカギとなる情報を明示的に記述できる事象構造モデルがその前提として必要となるであろう。

また、日本語結果表現のより包括的な研究を目指すには、本稿で詳しく論じなかった――あるいは、全くふれなかった――タイプの文にも目を向ける必要がある。それらも射程に入れると、動詞や非動詞成分のさらに詳しい意味分析が要求されることになる。例えば、(3c)「ライトで水が白く光った」と(13b)「水が白く濁った」の共通点と相違点を正しくとらえるためには、＜結果相＞を＜行為＞と＜変化＞の＜持続性＞という観点からさらに細かく記述し分けることが必要となり、(59)のようなタイプの文まで射程に入れると、＜完結点＞をマクロレベルとミクロレベルに分けて規定することが必要となるであろう(これらの点に関する議論は宮腰(2008: 24-26)を参照)。

(59) a. ご飯を美味しく食べた。
　　b. 論文を興味深く読んだ。

さらに、本稿は議論を日本語に限定したが、ここで提案した分析を他の言語に適用することによって、結果表現の通言語的特性の解明へとつながる可能性がある。そして、そのような比較・対照研究を通して、日本語結果表現の類型論的特異性が

明確に浮かび上がってくる可能性もある。一つの例として英語を見てみると、(58)にまとめた5種類の結果表現のうち、半分程度——a/c/dタイプの一部——しか容認されないことがわかる。特に、日本語では広く使われているbタイプ——(14)「花子がケーキを美味しく作った/一郎が庭に穴を深く掘った」のような産物指向タイプ——に対応する表現がほとんど全く容認されない点は注目に値する。

(60)　a.　*Mary made a cake delicious.

　　b.　*John dug a hole deep in the garden.

これはおそらく、英語の結果表現は使役構文がベース(の一つ)となっているため、初期相から存在しているモノである被行為・状態(位置)変化主指向タイプ、またはそれが動詞に後続する位置に生起する副産物指向タイプしか基本的に許されないのであろう。[47] また、それに加えて英語の「結果句」は日本語のそれに比べて述語性が高いので、同格連用修飾や主語/外項指向タイプなどもほとんど容認されない。

(61)　a.　*Nancy dyed her hair black beautiful.

　　b.　*Bill ate the rice balls full.

前節で挙げた、非常に周辺的なタイプ——「[甘さを控えめに]ケーキを作る」や「[枝もたわわに]柿が実る」など——に至っては、全く容認されない。

(62)　a.　*Tom made a cake sweetness moderate.

　　b.　*The persimmons ripened the branches bent.

この視点から日本語結果表現を見直すと、先行研究の見解とは逆に、その許容範囲の広さが際立って見える。確かに、ある種の結果表現——特に4節で挙げた潜在的結果動詞([(−)resultative]の動詞)を含む結果構文(例えばJohn shouted himself hoarseタイプの文)——に注目すれば、英語(や他のゲルマン系言語)は日本語より結果表現が発達しているように見えるが、本研究の視座に立てば、全体としては日本語の方がむしろ発達していると言える。このように、対象言語の射程を拡げることによって、本研究は類型論的にもより興味深い研究へと発展していく見込みがある。

注

*本稿の執筆にあたり、井本亮・岩田彩志・中村嗣郎・小野塚裕視の各氏から貴重なコメントをいただいた。記して感謝したい。

1　本稿では、ある用語が未定義であることを強調する際と用語/表現を際立たせて表す際には鉤括弧「 」を、ある概念/意味を際立たせて表す際には角括弧＜＞を使用する。

2　厳密には、「状態」という語は二つの意味で用いられるが、その点は次節で論じる。

3　さらに踏み込めば、そもそも「コトを部分に分割する」とは、どのような基準——特に、どの程度の細密度(granularity)——でなされるべきか、という根本的な問題があるが、本稿では暫定的に、事象構造に関する先行研究で広く受け入れられている三分割——＜行為＞・＜変化＞・＜状

態＞（ただし、＜変化＞は原始概念ではなく、二つの異なる＜状態＞から成る構成概念）――を仮定しておく。それらから成る事象構造のタイプはすぐ後で取り上げる。

4　議論はこの後、因果関係には直接的に依拠しない「結果」の規定の必要性を論証する方向に進むので、因果関係をどう規定するかは本稿の主張にとって（無関係ではないが、少なくとも当面は）決定的に重要ではない。

5　ここで重要なのは「完全に」という限定副詞である。4節で示されるように、（原因に対する概念としての）＜結果＞は、＜原因＞の中に完全に含まれてさえいなければ、かなりの部分重なっていても同定可能である。

6　さらに言えば、力動性（force-dynamics）に基づく事象・動詞の特徴づけをしない限り、（1a）「一郎が花瓶を粉々に割った」と（5b）「＊本棚が花瓶を粉々に倒れた」の間にも線を引けない。この点はすぐ後でふれる。また、（5b）の非文法性は単に自動詞「倒れる」がヲ格の名詞句を取れないためだと考える者がいるかもしれないが、次の例が示すように、自動詞が"目的語"（のような成分）を取ることは一律に許されないわけではない。

(i)　一郎が身を粉に働いた。

(ii)　John shouted himself hoarse.

7　本稿は、（ある状態/位置から別の状態/位置への移行という）普通の意味での＜変化＞に加えて、＜発生＞と＜消滅＞も（それぞれ無から有、有から無への状態移行とみなせるので）広い意味での＜変化＞とみなす。したがって、「生まれる/消える」なども変化動詞の一種として分類される。また、「作る/消す」のような＜作成/消去＞を表す動詞も行為・変化動詞の範疇に含まれる。この点は5節で詳しく論じる。

8　位置変化の場合は別のテストが必要だが、本稿は純粋な位置変化事象は扱わないので、その問題には踏み込まない。

9　ただし、基本的に行為しか表さない動詞でも、ある条件を満たせば「Vした状態」と言えることがある。その点は4節で具体的に論じる。

10　モノの恒常的サマに対しては「属性」という用語を用いるが、モノのサマの恒常性は文脈や概念化の仕方によっても変わり得るという点には注意が必要である。

11　「厚切り」の「厚」のような成分まで考慮に入れるなら、「語」の下位要素の「語幹」まで含まれる。

12　人が意図的に＜倒れる＞という行為をした場合でも、（i）のように言うことはできないが（中村嗣郎氏のご指摘による）、この種の結果表現が容認されないのは、日本語では結果表現に生起可能な動詞のタイプが限られていること（4節を参照）に加えて、動詞「倒れる」の語彙情報と非動詞成分「粉々」の語彙情報との間に概念領域の点での不整合があるため（注17を参照）であると思われる。

(i) ＊一郎が（意図的に）花瓶を粉々に倒れた。

13　ただし、2節で指摘したように、「粉々に」がなければ（6a）の意味での＜結果＞の同定はできなくなるので、（2a）「花瓶が割れた」はパラフレーズできない。

14　注11で挙げた「厚切り」のような動詞由来の派生語や「もっと薄く（切ってください）」のような断片的な発話は除外しておく。

15　厳密には、上記のキャンセル文のテストは話者によって容認度に差が出ることもあるので、この二つのタイプの線引きは簡単ではない上に、「含意」と「内含」をLCSでどう記述し分けるか

という理論的問題もある。それらの問題はいくつかの先行研究でふれられているが(cf. 宮島 1985: 348-53; 宮腰 2008: 31-32, 58-59)、本稿ではこれ以上踏み込まない。

16　英語(や他のゲルマン系の言語)でいわゆるstrongタイプの結果構文(例えば注６で挙げたJohn shouted himself hoarseのような文)に現れることができるのはこの種の動詞である。

17　この文は、上記の理由で原理的に結果表現としての解釈はできないが、広い意味の状態を表す文としても容認されない。これはおそらく、存在動詞「ある」が補語として要求している成分(ニ格名詞句)と実際の連用成分(「粉々に」)とが概念領域の点で整合していない――前者はトコロであるのに対して、後者はサマである――ことに起因していると思われる。

18　図を単純化するために、例えば「花瓶を粉々に割った」や「髪を黒く染めた」のような動詞句レベルの結果成分は除外してある。また、「結果句」と「結果構文」が網掛けにしてあるのは、その特徴づけがまだ十分になされておらず、本稿後半で詳しく検討されることを示している。

19　「一郎が花瓶を粉々にたたき割った」のように、結果複合動詞と「結果句」の組み合わせから成る「結果構文」も数多くあるが、上記の理由で本稿では動詞内部の複雑性は問題にしない。

20　ただし、日英語では動詞の種類が異なる。「実る」は変化動詞であり、shoutは行為動詞である。

21　さらに言えば、そもそも述語成分の二次性とその省略可能性を同一視することにも検討の余地がある。その立場の分析(例えば影山 1996, 2001)では、(1a)「一郎が花瓶を粉々に割った」の「粉々に」のような成分は省略できるので「二次述語」、上記の例の「たわわに/hoarse」のような成分は省略できないので「一次述語」とみなされることになるが、後者もあくまで動詞「実る/shout」に(後ほど述べる意味で)従属する成分であるので、主動詞が「一次」であるのに対して「二次」的な述語であることに変わりはない。いずれにしろ(「たわわに/hoarse」のような述語が「一次」であれ「二次」であれ)、ここでの主張のポイントは、それらと上記の例の「きれいに/clean」のような成分を区別するには、<省略(不)可能性>ではなく、上で定義した意味での<義務性[±obligatory]>という素性が必要であるという点にある。

22　井本(2012)は、連用修飾関係の多様性と柔軟性――同じ修飾成分が異なる被修飾成分と結びつくことによっていかに多様な連用修飾関係を柔軟に生み出すか――について、独創的な視座から説得力のある議論を展開している。

23　ただし、中にはある程度特異な指向性を持った語彙もある。その点は６節でふれる。

24　厳密には、<粉々>の値にもある程度の幅を認めることはできるが、本稿ではそこまで立ち入らない。少なくとも、最大値が指定できない開放スケール(<甘さ>)の値とは質的に異なる。「熟す」のスケールの最大値と標準値の違いに関してはKearns(2007: 13-14)やMiyakoshi(2010: 13-14)を参照。

25　(13b)の「白く」はスケールの値を表しているとは言えないが、「少し」のような程度副詞で修飾することも「真(っ)」のような接頭辞を付けることもできるので、「白」にスケールが全くないわけではない。

26　それが文の容認度の違いとして顕著に表れる言語もある。その点は８節でふれる。

27　別の形式にするとその違いが表れるが、その点はすぐ後で論じる。

28　８節で述べるように、この区別は対応する英語の「結果構文」の振る舞いを説明する際にも必要である。

29　注27でふれたように、(15)・(16)においても、産物指向タイプは連体修飾関係を含む表現と交替可能だが、被行為・状態変化主指向の場合は、産物との意味的違いに応じて大きく意味が変わる。

(i)　a. 二郎が美味しいお米を炊いた。　(≠(15a))
　　b. 二郎が美味しいごはんを炊いた。　(≒(15b))
(ii)　a. 三郎がきれいな折り紙を折った。　(≠(16a))
　　b. 三郎がきれいな鶴を折った。　(≒(16b))

これは産物(ごはん/鶴)の場合は連体修飾でも結果相におけるサマを表しているが、被行為・状態変化主(お米/折り紙)の場合は初期相におけるサマ――厳密には、<状態>というよりむしろ<属性>――を表すことになるからである。

30　川野(2009)や井本(2012)は「総体変化」や「一体性変化」といったキーワードで上記の結果表現を見事に記述・説明している。

31　岩田(2009: 200)の指摘もこれと同趣旨であると思われるが、別の箇所(ibid.: 181)では微妙に異なる分析をしている。

32　本節は「結果句」を主にそれが表すモノのサマのモノの側から分類しているが、それが表しているのは結果相におけるモノのサマのみであると主張しているわけではないことを再度強調しておく。この点は6節で詳しく議論する。

33　(29a/d)はいずれも<被行為主>がある場合とない場合を一まとめにし、(29e)は<状態変化主>と<位置変化主>を一まとめにしているが、それらを細かく分ければ8タイプになる。また、モノのサマを直接的に描写しているというよりは、モノのサマのサマやホドを表している成分を含む結果表現((10)、(21)～(23)、(27)・(28))も細かく下位分類すればタイプはさらに増えるが、ここではとりあえずそれらも「周辺的」タイプとして括弧に入れて表示しておく。続く二つの節での議論を経た後には、それらがどのような意味で「周辺的」なのかがさらに明確になる。

34　これはちょうど、<被行為主(行為の対象のモノ)>と<変化主(状態/位置変化するモノ)>の間にある内在的相関関係と同じように、究極的には、言語・文法レベルで改めて仮定する必要はなく、外界の物理的法則に帰され得る種類の制約と考えられる。

35　パラフレーズはどこまでいっても近似にすぎず、元の表現と意味的に全く同じということには(形式が異なれば意味も異なるという原則を仮定すると)原理的にならない点に注意。

36　松井・影山(2009: 276)は「話者の主観的判断を表す形容詞は、英語でも日本語でも結果述語になることができない」と述べており、その立場では、(13a)「苺が甘く熟した」は(何かを甘いと感じるかどうかは主観的な判断なので)「結果構文」ではないことになるが、本稿は二つの理由でそのような恣意的な規定は採用しない。まず、その規定ではありふれた結果表現――例えば「お米を美味しく炊く」「部屋をきれいに掃除する」「髪を美しく染める」等はすべて――「結果構文」の範疇から除外されるが、それらと松井・影山(2009)が「結果構文」とみなしている文との間に本質的な違いがあるとは思えない(少なくともそれを客観的に示す証拠は提示されていない)。さらに、そもそも言語話者によるモノの属性/状態の知覚・概念化を「主観か客観か」という二分法で捉えようとすること自体に無理がある。多くの心理学者や認知言語学者が指摘しているように、我々ヒトはモノの属性/状態をたいていそれに対する行為に伴う体感(主観的な感覚)を通して概念化するからである(この点に関する議論はGibson 1979: 133-34; Lakoff 1987: 51; Langacker 1995: 52-53; 早瀬 2008: 140-41等を参照)。

37　この意味において、いわゆる「疑似結果構文」はかなり周辺的タイプと言える(cf. 注33)。

38　議論の公正さのために付記しておくが、影山(2009)や松井・影山(2009)は宮腰(2006)の挙げた例の中で「お腹いっぱい」ではなく「腹八分」という語を含む文を(おそらく意図的に)取り上げ

ているが、「腹八分」に替えてもそれがコトのホド(どの程度食べたか)と主語/外項の指すモノ(行為・状態変化主)の結果相におけるサマ(どういう状態か)を表していることに変わりはない。「腹八分」がモノのサマも表すことができるということは、次のようなやり取りが自然であることからもわかる。

(i) 食後の家族の会話：

A：デザートあるんだけど、もうお腹いっぱい？

B：まだ腹八分だから食べるよ。[腹八分：Bの状態]

もし「腹八分食べる」の「腹八分」が結果相における主語(外項)の指示物の状態を表していないなら、同じ論理で「お腹いっぱい食べる」の「お腹いっぱい」もそれを表していないことになるが、そのような解釈をする日本語話者は、筆者の知る限り、一人もいない。したがって、「腹八分」と「お腹いっぱい」には副詞性/述語性の程度の微妙な違いはあるものの、「結果句」としてはほぼ同種と言える。

39　この文脈で興味深いのはむしろ、「満腹」という語である。「お腹いっぱい」と「満腹」は同義に思われるが、おもしろいことに、(26a)「一郎がおにぎりをお腹いっぱいに食べた」の「お腹いっぱい」を「満腹」に替えると容認度がかなり落ちる。

(i) ??/*一郎がおにぎりを満腹に食べた。

これはおそらく両者の語彙的な指向性に関する違い――「お腹いっぱい」は語彙的に副詞性が強いこと――に拠るものであり、それはさらに語の成り立ち――「お腹いっぱい」は、「お菓子を袋(に)いっぱいに詰める」や「ポスターを壁(に)一面に張る」のような、「3次元(2次元)の着点＋いっぱい(一面)にVする」という広く確立した表現の一種であること――に起因していると思われる。

40　それらに加えて、次の例の「ふっくらと」や「ふっくら」のようなタイプの成分も(30)の定義の下では述語的副詞となり、それらは品詞論に関わる興味深い問題を提起するが、本稿では紙幅の都合でこの問題には踏み込まない。

(i) 冬子がごはんをふっくらと炊いた。

(ii) 冬子がごはんをふっくら炊いた。

41　4節で指摘したように、一見反例に見える例には注意されたい。

42　それらは単なる等位接続ではない。例えば、(50a)の「白く美しく」は「白く」と「美しく」が同格成分としてそれぞれ動詞「塗った」を連用修飾しており、等位接続されているわけではない。その証拠に、(50a′)に示されているように、それを「白くて美しく」とパラフレーズすることはできない。

43　(52b)の二つの非動詞結果成分(「厚さを3ミリに」と「均等に」)の指向先のモノは微妙に異なる点に注意――前者は＜個々のスライス＞の絶対的なサマを、後者は＜それらの集合の中の成員同士＞の相対的なサマを表している。

44　その種の証拠がない限り、本来、「結果句」が副詞ではなく述語であるという主張はできないはずである。

45　(54b/c)では、(54a)との比較のために、語順を入れ替えてある。

46　もともとモノ/コトのどちらとも整合するタイプも数多くある――例えば、「軽」は「軽いボール」ではモノのサマ、「ボールを軽く打つ」ではコトのサマをそれぞれ表している。注40で挙げたタイプ(「冬子がごはんをふっくら(と)炊いた」のような結果表現)を適切に記述するには、接辞

「－ト/∅」の意味・機能の解明も必要である。

47　この特性の重要性に関しては、Washio（1997）や岩田（2012）が興味深い議論をしている。

参考文献

Gibson, James J.（1979）*The Ecological Approach to Visual Perception.* Boston: Houghton.

Goldberg, Adele E.（1995）*Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: University of Chicago Press.

早瀬尚子（2008）「形容詞か副詞か？――副詞としての形容詞形とその叙述性」『認知言語学論考』8, 125-155.

井本　亮（2003）「現代日本語における副詞的修飾関係の研究」博士論文, 筑波大学.

井本　亮（2006）「状態変化の修飾――副詞的修飾関係の決定要因と事象構造」矢澤真人・橋本修（編）『現代日本語文法　現象と理論のインタラクション』, 241-272, ひつじ書房.

井本　亮（2007）「[向き]を表す副詞的成分をめぐって――「机に茶碗をさかさまに置いた」の成立条件――」『日本語文法』7-2, 137-153.

井本　亮（2009）「日本語結果構文における限定と強制」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』, 267-313, ひつじ書房.

井本　亮（2012）「日本語の「結果構文」の位置づけと連用修飾文：形式と意味のおける「ずれ」」、日本英文学会第84回大会シンポジウム「結果表現をめぐって」口頭発表.

岩田彩志（2006）「Spurious ResultativeはResultativeでないか？」卯城祐司・太田一昭・太田聡・滝沢直宏・田中伸一・西田光一・山田英二（編）『言葉の絆――藤原保明博士還暦記念論文集』, 17-30, ひつじ書房.

Iwata, Seizi（2006）Argument Resultatives and Adjunct Resultatives in a Lexical Constructional Account: The Case of Resultatives with Adjectival Result Phrases. *Language Sciences* 28, 449-496.

Iwata, Seizi（2008）A Door that Swings Noiselessly Open May Creak Shut: Internal Motion and Concurrent Changes of State. *Linguistics* 46, 1049-1108.

岩田彩志（2009）「２種類の結果表現と構文理論」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』、171-216, ひつじ書房.

岩田彩志（2012）「結果表現において動詞に後続する名詞句が果たす役割」日本英文学会第84回大会シンポジウム「結果表現をめぐって」口頭発表.

Jackendoff, Ray（1990）*Semantic Structures.* Cambridge, MA: MIT Press.

影山太郎（1996）『動詞意味論――言語と認知の接点』くろしお出版.

影山太郎（2001）「結果構文」、影山太郎（編）『日英対照　動詞の意味と構文』、154-181、大修館.

影山太郎（2009）「語彙情報と結果述語のタイポロジー」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』、101-139、ひつじ書房.

加藤鉱三（2007）「日本語結果述語は動作オプション表現である」小野尚之（編）『結果構文研究の新視点』, 217-248, ひつじ書房.

川端善明（1983）「副詞の条件」渡辺実（編）『副用語の研究』, 1-34, 明治書院.

川野靖子（2003）「位置変化動詞と結果の副詞句」『筑波日本語研究』8, 39-48.

川野靖子（2009）「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞――交替の可否を決定する意味階

層の存在――」『日本語の研究』5-4, 47-61.

Kearns, Kate (2007) Telic Senses of Deadjectival Verbs. *Lingua* 117, 26-66.

黒田航・李在鎬・井佐原均(2005)「結果述語と結果構文の定義を再考する：結果構文の共述語分析の提案」日本英語学会第23回大会ワークショップ「結果述語の意味論」口頭発表.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about Mind.* Chicago: University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (1995) Raising and Transparency. *Language* 71-1, 1-62.

松井夏津紀・影山太郎(2009)「副詞と二次述語」影山太郎(編)『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』, 260-292, 大修館書店.

McCawley, James D. (1976) Remarks on What can Cause What. Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions,* 117-129, New York: Academic Press.

三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一『ヴォイスとアスペクト』, 107-186, 研究社出版.

宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」――動詞の意味における＜結果性＞――」『計量国語学』14-8, 335-353.

宮腰幸一(2006)「非目的語志向の結果述語――統合的情報共有の更なる証拠――」『日本語文法』6-1, 3-20.

宮腰幸一(2007a)「"疑似"結果構文：周辺的現象から理論的課題へ(上)(下)」『英語青年』1月号, 39-42; 2月号, 40-43.

宮腰幸一(2007b) "Peripheral" Resultatives and Related Constructions. 日本英文学会第79回大会シンポジウムIssues in the Study of Resultatives: Ten Years After口頭発表.

宮腰幸一(2007c)「結果句の定義と分類について――意味・機能的アプローチ――」『日本語文法』7-2, 101-119.

宮腰幸一(2008)「テイル文の意味的分析――動詞分類と事象構造の精密化へ向けて――」『論叢　現代語・現代文化』1, 1-98.

宮腰幸一(2009)「日英語の周辺的結果構文――類型論的含意」小野尚之(編)『結果構文のタイポロジー』, 217-265, ひつじ書房.

Miyakoshi, Koichi (2010) Parallel Event Structures: Evidence from English. *English Linguistics* 27-1, 1-42.

宮腰幸一(2012)「「結果句」の述語性と副詞性について：結果表現の定義と分類」日本英文学会第84回大会シンポジウム「結果表現をめぐって」口頭発表.

仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版.

奥津敬一郎(1983)「変化動詞文における形容詞移動」渡辺実(編)『副用語の研究』, 317-339. 明治書院.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure.* Cambridge, MA: MIT Press.

Rappaport Hovav, Malka, and Beth Levin (1998) Building Verb Meanings. Miriam Butt and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors,* 97-134, Stanford, CA: CSLI.

Rappaport Hovav, Malka, and Beth Levin (2010) Reflections on Manner/Result Complementarity. Malka Rappaport Hovav, Edit Doron, and Ivy Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure,* 21-38, Oxford: Oxford University Press.

斉木美知世(2004)「結果表現の類型論」筑波大学現代言語学研究会(編)『次世代の言語研究III』, 157-234.

申亜敏・望月圭子(2009)「中国語の結果複合動詞：日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から」小野尚之(編)『結果構文のタイポロジー』, 407-450, ひつじ書房.

Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」仁田義雄, 村木新次郎, 柴谷方良, 矢澤真人(著)『日本語の文法1　文の骨格』, 187-233, 岩波書店.

矢澤真人(2007)「日本語情態修飾関係の研究」博士論文, 筑波大学.